

介護保険法に基づく指定介護予防サービス事業者の指定の申請者に関する事項並びに指定介護予防サービス等の事業の人員、設備及び運営並びに指定介護予防サービス等に係る介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準を定める条例をここに公布する。

平成二十四年十二月二十五日

広島県知事 湯 崎 英 彦

## 広島県条例第六十九号

介護保険法に基づく指定介護予防サービス事業者の指定の申請者に関する事項並びに指定介護予防サービス等の事業の人員、設備及び運営並びに指定介護予防サービス等に係る介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準を定める条例

### 目次

- 第一章 総則（第一条―第三条）
- 第二章 指定の申請者に関する事項（第四条）
- 第三章 介護予防訪問介護
  - 第一節 基本方針（第五条）
  - 第二節 人員に関する基準（第六条・第七条）
  - 第三節 設備に関する基準（第八条）
  - 第四節 運営に関する基準（第九条―第二十四条）
  - 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第二十五条・第二十六条）
- 第四章 介護予防訪問入浴介護
  - 第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準（第二十七条―第三十一条）
- 第五章 介護予防訪問看護
  - 第一節 基本方針（第四十七条）
  - 第二節 人員に関する基準（第四十八条・第四十九条）

第三節 設備に関する基準（第五十条）

第四節 運営に関する基準（第五十一条―第五十六条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第五十七条―第五十九条）

## 第六章 介護予防訪問リハビリテーション

第一節 基本方針（第六十条）

第二節 人員に関する基準（第六十一条）

第三節 設備に関する基準（第六十二条）

第四節 運営に関する基準（第六十三条―第六十五条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第六十六条・第六十七条）

## 第七章 介護予防居宅療養管理指導

第一節 基本方針（第六十八条）

第二節 人員に関する基準（第六十九条）

第三節 設備に関する基準（第七十条）

第四節 運営に関する基準（第七十一条―第七十三条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第七十四条・第七十五条）

## 第八章 介護予防通所介護

第一節 基本方針（第七十六条）

第二節 人員に関する基準（第七十七条・第七十八条）

第三節 設備に関する基準（第七十九条）

第四節 運営に関する基準（第八十条―第八十四条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第八十五条―第八十七条）

第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準（第八十八条―第九十一条）

## 第九章 介護予防通所リハビリテーション

第一節 基本方針（第九十二条）

第二節 人員に関する基準（第九十三条）

第三節 設備に関する基準（第九十四条）

第四節 運営に関する基準（第九十五条―第九十七条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第九十八条―第一百条）

## 第十章 介護予防短期入所生活介護

### 第一節 基本方針（第一百一条）

第二節 人員に関する基準（第一百二条・第一百三条）

第三節 設備に関する基準（第一百四条・第一百五条）

第四節 運営に関する基準（第一百六条―第一百十三条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第一百四条―第一百七  
条）

第六節 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護に関する基準

第一款 趣旨及び基本方針（第一百八条・第一百九条）

第二款 設備に関する基準（第一百二十条・第一百二十一条）

第三款 運営に関する基準（第一百二十二条―第一百二十六条）

第四款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第一百二十七条―第百  
二十九条）

第七節 基準該当介護予防サービスに関する基準（第一百三十条―第一百三十五条）

## 第十一章 介護予防短期入所療養介護

第一節 基本方針（第一百三十六条）

第二節 人員に関する基準（第一百三十七条）

第三節 設備に関する基準（第一百三十八条）

第四節 運営に関する基準（第一百三十九条―第一百四十四条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第一百四十五条―第百四  
十九条）

第六節 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護に関する基準

第一款 趣旨及び基本方針（第一百五十条・第一百五十一条）

第二款 設備に関する基準（第一百五十二条）

第三款 運営に関する基準（第一百五十三条―第一百五十七条）

第四款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第一百五十八条―第百  
六十条）

## 第十二章 介護予防特定施設入居者生活介護

第一節 基本方針（第一百六十一条）

第二節 人員に関する基準（第一百六十二条・第一百六十三条）

第三節 設備に関する基準（第一百六十四条）

第四節 運営に関する基準（第一百六十五条―第一百七十二条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第七十三条―第七十六条）

第六節 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護に関する基準

第一款 趣旨及び基本方針（第七十七条・第七十八条）

第二款 人員に関する基準（第七十九条・第八十条）

第三款 設備に関する基準（第八十一条）

第四款 運営に関する基準（第八十二条―第八十五条）

第五款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第八十六条・第八十七条）

第十三章 介護予防福祉用具貸与

第一節 基本方針（第八十八条）

第二節 人員に関する基準（第八十九条・第九十条）

第三節 設備に関する基準（第九十一条）

第四節 運営に関する基準（第九十二条―第九十五条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第九十六条―第九十八条）

第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準（第九十九条・第一百条）

第十四章 特定介護予防福祉用具販売

第一節 基本方針（第二十一条）

第二節 人員に関する基準（第二十二条・第二十三条）

第三節 設備に関する基準（第二十四条）

第四節 運営に関する基準（第二十五条―第二十七条）

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準（第二十八条―第二十条）

第十五章 雑則（第二十一条）

附則

第一章 総則

（趣旨）

第一条 この条例は、介護保険法（平成九年法律第二百二十三号。以下「法」という。）第五十四条第一項第二号、第一百五十五条の二第二項第一号並びに第一百五十五条の四第一項及び第二項の規定に基づき、指定介護予防サービスの事業を行う者（以下「指定介護予防サービス事業者」という。）の指定の申請者に関する事項、指定介護予防サービスの事業

の人員、設備及び運営並びに指定介護予防サービスに係る介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準並びに基準該当介護予防サービスに関する基準を定めるものとする。

(定義)

第二条 この条例で使用する用語は、法で使用する用語の例による。

2 前項に定めるもののほか、この条例において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 介護予防サービス事業者 介護予防サービス事業を行う者をいう。

二 利用料 介護予防サービス費の支給の対象となる費用に係る対価をいう。

三 介護予防サービス費用基準額 法第五十三条第二項第一号又は第二号に規定する厚生労働大臣が定める基準により算定した費用の額（その額が現に当該指定介護予防サービスに要した費用の額を超えるときは、当該現に指定介護予防サービスに要した費用の額とする。）をいう。

四 法定代理受領サービス 法第五十三条第四項の規定により介護予防サービス費が利用者により当該指定介護予防サービス事業者を支払われる場合の当該介護予防サービスに係る指定介護予防サービスをいう。

五 常勤換算方法 事業所の従業者の勤務延べ時間数を当該事業所において常勤の従業者が勤務すべき時間数で除することにより、当該事業所の従業者の員数を常勤の従業者の員数に換算する方法をいう。

(指定介護予防サービスの事業の一般原則)

第三条 指定介護予防サービス事業者は、利用者の意思及び人格を尊重して、常に利用者の立場に立ったサービスの提供に努めなければならない。

2 指定介護予防サービス事業者は、指定介護予防サービスの事業を運営するに当たっては、地域との結び付きを重視し、市町村（特別区を含む。以下同じ。）並びに介護予防支援事業者（介護予防支援事業を行う者をいう。以下同じ。）、他の介護予防サービス事業者その他の保健医療サービス及び福祉サービスを提供する者との連携に努めなければならない。

第二章 指定の申請者に関する事項

第四条 法第一百五十五条の二第二項第一号の条例で定める者は、法人とする。ただし、病院診療所又は薬局により行われる介護予防居宅療養管理指導に係る指定及び病院又は診療所により行われる介護予防訪問看護、介護予防訪問リハビリテーション、介護予防通所リハビリテーション又は介護予防短期入所療養介護に係る指定の申請については、この

限りでない。

### 第三章 介護予防訪問介護

#### 第一節 基本方針

第五条 指定介護予防サービスに該当する介護予防訪問介護（以下「指定介護予防訪問介護」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、要支援状態の維持若しくは改善を図り、又は要介護状態となることを予防し、自立した日常生活を営むことができるよう、入浴、排せつ、食事の介護その他の生活全般にわたる支援を行うことにより、利用者の心身の機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

#### 第二節 人員に関する基準

（従業者）

第六条 指定介護予防訪問介護の事業を行う者（以下「指定介護予防訪問介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防訪問介護事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、訪問介護員等（指定介護予防訪問介護の提供に当たる介護福祉士又は法第八条の二第二項に規定する政令で定める者をいう。以下この節から第五節までにおいて同じ。）とし、その員数は、常勤換算方法で、二・五以上とする。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護事業所ごとに、常勤の訪問介護員等のうち、利用者（指定介護予防訪問介護事業者が、指定訪問介護事業者（介護保険法に基づく指定居宅サービス事業者の指定の申請者に関する事項並びに指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準を定める条例（平成二十四年広島県条例第六十八号。以下「指定居宅サービス等基準条例」という。）第六条第一項に規定する指定訪問介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問介護の事業と指定訪問介護（指定居宅サービス等基準条例第五条に規定する指定訪問介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあっては、当該事業所における指定介護予防訪問介護及び指定訪問介護の利用者。以下この条において同じ。）の数が四十又はその端数を増すごとに一人以上の者をサービス提供責任者としなければならない。ただし、当該サービス提供責任者の員数の一部については、利用者の数に応じて常勤換算方法によることができる。

3 前項の利用者の数は、当該月の前三月の平均値とする。ただし、新規に指定介護予防訪問介護事業者の指定を受ける場合その他これによることのできない場合は、推定数による。

4 第二項のサービス提供責任者は、介護福祉士その他知事が定める者であって、専ら指定介護予防訪問介護に従事するものでなければならない。ただし、利用者に対する指定

介護予防訪問介護の提供に支障がない場合は、同一敷地内にある指定定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所（指定地域密着型サービスに該当する定期巡回・随時対応型訪問介護看護の事業を行う者が当該事業を行う事業所をいう。）又は指定夜間対応型訪問介護事業所（指定地域密着型サービスに該当する夜間対応型訪問介護の事業を行う者が当該事業を行う事業所をいう。）の他の従業者の職務に従事することができる。

5 指定介護予防訪問介護事業者が、指定訪問介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問介護の事業と指定訪問介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第六条第一項から第四項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第七条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防訪問介護事業所の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防訪問介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三節 設備に関する基準

第八条 指定介護予防訪問介護事業所には、指定介護予防訪問介護の事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の区画を設けるほか、指定介護予防訪問介護の提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。

2 指定介護予防訪問介護事業者が、指定訪問介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問介護の事業と指定訪問介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第八条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第四節 運営に関する基準

（内容及び手続の説明及び同意）

第九条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護の提供の開始に際し、あらかじめ、利用申込者又はその家族に対し、第十九条に規定する重要事項に関する規程の概要、訪問介護員等の勤務の体制その他の利用申込者のサービスの選択に資すると認められる重要事項を、文書の交付その他規則で定める方法により明示して説明し、当該

指定介護予防訪問介護の提供の開始について当該利用申込者の同意を得なければならない。

い。

(提供拒否の禁止)

第十条 指定介護予防訪問介護事業者は、正当な理由なく指定介護予防訪問介護の提供を拒んではならない。

(サービス提供困難時の対応)

第十一条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護事業所の通常の事業の実施地域（当該事業所が通常時に当該サービスを提供する地域をいう。以下同じ。）等を勘案し、利用申込者に対し自ら適切な指定介護予防訪問介護を提供することが困難であると認めた場合は、介護予防支援事業者への連絡、適当な他の指定介護予防訪問介護事業者等の紹介その他の必要な措置を速やかに講じなければならない。

(受給資格等の確認)

第十二条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護の提供を求められた場合には、当該提供を求めた者の提示する被保険者証によって、被保険者資格、要支援認定の有無及び要支援認定の有効期間を確かめるものとする。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、前項の被保険者証に、認定審査会意見が記載されているときは、当該認定審査会意見に配慮して、指定介護予防訪問介護を提供するように努めなければならない。

(介護予防サービス計画に沿ったサービスの提供)

第十三条 指定介護予防訪問介護事業者は、介護予防サービス計画（規則で定める計画を含む。以下同じ。）が作成されている利用者に対しては、当該介護予防サービス計画に沿った指定介護予防訪問介護を提供しなければならない。

(サービスの提供の記録)

第十四条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護を提供した際には、提供した具体的なサービスの内容等を記録するとともに、利用者からの申出があった場合には、文書の交付その他適切な方法により、当該記録の内容を利用者に提供しなければならない。

(利用料等の受領)

第十五条 指定介護予防訪問介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防訪問介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防訪問介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防訪問介護事業者を支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるも



のとする。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防訪問介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようになければならない。

3 指定介護予防訪問介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、利用者の選定により通常の事業の実施地域以外の地域に所在する居室において指定介護予防訪問介護を提供する場合は、当該提供に要した交通費の額の支払を当該利用者から受けることができる。

4 指定介護予防訪問介護事業者は、前項の交通費の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

(同居家族に対するサービス提供の禁止)

第十六条 指定介護予防訪問介護事業者は、訪問介護員等に、当該訪問介護員等と同居している家族である利用者に対して介護予防訪問介護の提供をさせてはならない。

(緊急時等の対応)

第十七条 訪問介護員等は、指定介護予防訪問介護の提供時に利用者に病状の急変が生じたときその他必要なときは、速やかに主治の医師への連絡を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

(管理者及びサービス提供責任者の責務)

第十八条 指定介護予防訪問介護事業所の管理者は、当該指定介護予防訪問介護事業所の従業者及び業務の管理を、一元的に行わなければならない。

2 指定介護予防訪問介護事業所の管理者は、当該指定介護予防訪問介護事業所の従業者にこの節及び次節に規定する事項を遵守させるため必要な指揮命令を行うものとする。

3 サービス提供責任者（第六条第二項に規定するサービス提供責任者をいう。以下この節及び次節において同じ。）は、次に掲げる業務を行うものとする。

一 指定介護予防訪問介護の利用の申込みに係る調整をすること。

二 利用者の状態の変化及びサービスに関する意向を定期的に把握すること。

三 サービス担当者会議（介護支援専門員が、介護予防サービス計画の作成のために介護予防サービス計画の原案に位置づけた指定介護予防サービス等の担当者を招集して行う会議をいう。以下同じ。）への出席等により、介護予防支援事業者等と連携を図ること。

四 訪問介護員等（サービス提供責任者を除く。以下この条において同じ。）に対し、利用者に対する具体的な援助の目標及び援助の内容を指示するとともに、利用者の状況に関する情報を伝達すること。

五 訪問介護員等の業務の実施状況を把握すること。

六 訪問介護員等の能力及び希望を踏まえた訪問介護員等の業務の管理を実施すること。

七 訪問介護員等に対する研修、技術指導等を実施すること。

八 前各号に掲げるもののほか、サービス内容の管理について必要な業務を実施すること。

#### （運営規程）

第十九条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防訪問介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 指定介護予防訪問介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 五 通常の事業の実施地域
- 六 緊急時等における対応方法
- 七 その他事業の運営についての重要事項

#### （介護等の総合的な提供）

第二十条 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護の事業の運営に当たっては、入浴、排せつ、食事等の介護又は調理、洗濯、掃除等の家事（以下この条において「介護等」という。）を常に総合的に提供するものとし、介護等のうち特定の支援に偏ることがあってはならない。

#### （秘密保持等）

第二十一条 指定介護予防訪問介護事業所の従業者及び管理者は、正当な理由がなく、その業務上知り得た利用者又はその家族の秘密を漏らしてはならない。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、当該指定介護予防訪問介護事業所の従業者及び管理者であった者が、正当な理由がなく、その業務上知り得た利用者又はその家族の秘密を漏らすことがないよう、必要な措置を講じなければならない。

3 指定介護予防訪問介護事業者は、サービス担当者会議等において、利用者の個人情報を用いる場合にあつては当該利用者の同意を、利用者の家族の個人情報を用いる場合に

あつては当該家族の同意を、あらかじめ文書により得ておかなければならない。

(介護予防支援事業者に対する利益供与の禁止)

第二十二條 指定介護予防訪問介護事業者並びにその従業者及び管理者は、介護予防支援事業者又はその従業者に対し、利用者に対して特定の事業者によるサービスを利用させることの対償として、金品その他の財産上の利益を供与してはならない。

(苦情処理等)

第二十三條 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者に提供した指定介護予防訪問介護に係る利用者及びその家族からの苦情に迅速かつ適切に対応するために、苦情の受付窓口の設置等の必要な措置を講じなければならない。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、前項の苦情を受け付けたときは、当該苦情の内容等を記録しなければならない。

3 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者に提供した指定介護予防訪問介護に関し、法第二十三條の規定による市町村が行う文書その他の物件の提出若しくは提示の求め又は市町村の当該職員からの質問若しくは照会に応じ、及び利用者からの苦情に関して市町村が行う調査に協力するとともに、市町村から指導又は助言を受けた場合には、当該指導又は助言に従つて必要な改善を行わなければならない。

4 指定介護予防訪問介護事業者は、市町村からの求めがあつた場合には、前項の改善の内容を当該市町村に報告しなければならない。

5 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者に提供した指定介護予防訪問介護に係る利用者からの苦情に関して国民健康保険団体連合会(国民健康保険法(昭和三十三年法律第百九十二号)第四十五條第五項に規定する国民健康保険団体連合会をいう。以下同じ。

一)が行う法第七十六條第一項第三号の調査に協力するとともに、国民健康保険団体連合会から同号の指導又は助言を受けた場合に、当該指導又は助言に従つて必要な改善を行わなければならない。

6 指定介護予防訪問介護事業者は、国民健康保険団体連合会からの求めがあつた場合には、前項の改善の内容を当該国民健康保険団体連合会に報告しなければならない。

(事故発生時の対応)

第二十四條 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者に対する指定介護予防訪問介護の提供により事故が発生したときは、速やかに必要な措置を講じるとともに、当該事故の状況及び当該事故に対して講じた措置について、市町村、当該利用者の家族、当該利用者に係る介護予防支援事業者等に連絡しなければならない。

2 指定介護予防訪問介護事業者は、前項の事故の状況及び事故に際して講じた措置につ

いて記録しなければならない。

- 3 第一項の事故の損害のうち、指定介護予防訪問介護事業者が賠償すべきものについては、速やかに賠償しなければならない。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

##### (指定介護予防訪問介護の基本的取扱方針)

- 第二十五条 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防訪問介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防訪問介護を提供しなければならない。

- 2 指定介護予防訪問介護事業者は、自らその提供する指定介護予防訪問介護の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

- 3 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

- 4 指定介護予防訪問介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

- 5 指定介護予防訪問介護事業者は、指定介護予防訪問介護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者が主体的に当該指定介護予防訪問介護事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

##### (指定介護予防訪問介護の具体的取扱方針)

- 第二十六条 指定介護予防訪問介護は、第五条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十三項までに定めるところにより提供する。

- 2 サービス提供責任者は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達、サービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

- 3 サービス提供責任者は、前項に規定する利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防訪問介護の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防訪問介護計画を作成するものとする。

- 4 前項の介護予防訪問介護計画は、当該介護予防訪問介護計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に

沿って作成されなければならない。

- 5 サービス提供責任者は、介護予防訪問介護計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。
- 6 サービス提供責任者は、介護予防訪問介護計画を作成した際には、当該介護予防訪問介護計画を利用者に交付しなければならない。
- 7 訪問介護員等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、前項の規定により交付した介護予防訪問介護計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。
- 8 訪問介護員等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うものとする。
- 9 訪問介護員等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、介護技術の進歩に対応し、適切な介護技術をもってサービスの提供を行うものとする。
- 10 サービス提供責任者は、介護予防訪問介護計画に基づくサービスの提供の開始の時から、少なくとも一月に一回、当該介護予防訪問介護計画に係る利用者の状態、当該利用者に対するサービスの提供状況等について、当該利用者に係る介護予防サービス計画を作成した指定介護予防支援事業者に報告するものとする。
- 11 サービス提供責任者は、当該介護予防訪問介護計画に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防訪問介護計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うとともに、当該モニタリングの結果を記録し、当該記録を前項の指定介護予防支援事業者に報告しなければならない。
- 12 サービス提供責任者は、前項のモニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防訪問介護計画の変更を行うものとする。
- 13 第二項から第十一項までの規定は、前項に規定する介護予防訪問介護計画の変更について準用する。

#### 第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準

（従業者）

第二十七条 基準該当介護予防サービスに該当する介護予防訪問介護又はこれに相当するサービス（以下「基準該当介護予防訪問介護」という。）の事業を行う者（以下「基準該当介護予防訪問介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「基準該当介護予防訪問介護事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、訪問介護員等（基準該当介護予防訪問介護の提供に当たる介護福祉士又は法第八条の二第二項に規定する政令で

定める者をいう。以下この節において同じ。）とし、その員数は、三以上とする。

2 基準該当介護予防訪問介護事業者は、基準該当介護予防訪問介護事業所ごとに、訪問介護員等のうち一人以上の者をサービス提供責任者としなければならない。

3 基準該当介護予防訪問介護の事業と基準該当訪問介護（指定居宅サービス等基準条例第二十八条第一項に規定する基準該当訪問介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合については、当該事業者は、同項及び同条第二項に規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第二十八条 基準該当介護予防訪問介護事業者は、基準該当介護予防訪問介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、基準該当介護予防訪問介護事業所の管理上支障がない場合は、当該基準訪問介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

（設備及び備品等）

第二十九条 基準該当介護予防訪問介護事業所には、基準該当介護予防訪問介護の事業の運営を行うために必要な広さを有する区画を設けるほか、基準該当介護予防訪問介護の提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。

2 基準該当介護予防訪問介護の事業と基準該当訪問介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第三十条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（同居家族に対するサービス提供の制限）

第三十条 基準該当介護予防訪問介護事業者は、訪問介護員等に、当該訪問介護員等と同居している家族である利用者に対して基準該当介護予防訪問介護の提供をさせてはならない。ただし、当該利用者に対する基準該当介護予防訪問介護が次の各号のいずれにも該当する場合には、この限りでない。

一 当該基準該当介護予防訪問介護が、離島、山間のへき地その他の地域であって、基準該当指定介護予防訪問介護のみによっては必要な介護予防訪問介護の見込量を確保することが困難であると市町村が認めるものに住所を有する利用者に対して提供される場合

- 二 当該基準該当介護予防訪問介護が、指定介護予防支援事業者又は基準該当介護予防支援の事業を行う者の作成する介護予防サービス計画に基づいて提供される場合
- 三 当該基準該当介護予防訪問介護が、第二十七条第二項に規定するサービス提供責任者の行う具体的な指示に基づいて提供される場合
- 四 当該基準該当介護予防訪問介護が、入浴、排せつ、食事等の介護をその主たる内容とする場合
- 五 当該基準該当介護予防訪問介護が、当該基準該当介護予防訪問介護を提供する訪問介護員等の当該基準該当介護予防訪問介護に従事する時間の合計時間が、当該訪問介護員が基準該当介護予防訪問介護に従事する時間の合計時間のおおむね二分の一を超えない範囲で行われる場合

2 基準該当介護予防訪問介護事業者は、前項ただし書の規定により、訪問介護員等に当該訪問介護員等と同居している家族である利用者に対して基準該当介護予防訪問介護の提供をさせる場合において、当該利用者の意向及び当該利用者に係る次条において準用する第二十六条第三項の介護予防訪問介護計画の実施状況等を確認した結果、当該基準該当介護予防訪問介護が適切に提供されていないと認めるときは、当該訪問介護員等に対する適切な指導を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

(準用)

第三十一条 第一節、第四節(第十五条第一項、第十六条、第二十条並びに第二十三条第五項及び第六項を除く。)及び前節の規定は、基準該当介護予防訪問介護の事業について準用する。この場合において、第十五条第二項中「法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問介護」とあるのは「基準該当介護予防訪問介護」と、同条第三項中「前二項」とあるのは「前項」と、第十八条第三項中「第六条第二項」とあるのは「第二十七条第二項」と読み替えるものとする。

#### 第四章 介護予防訪問入浴介護

##### 第一節 基本方針

第三十二条 指定介護予防サービスに該当する介護予防訪問入浴介護(以下「指定介護予防訪問入浴介護」という。)の事業は、利用者が可能な限りその居室において、自立した日常生活を営むことができるよう、居室における入浴の支援を行うことによって、利用者の身体の清潔の保持、心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

##### 第二節 人員に関する基準

(従業員)

第三十三条 指定介護予防訪問入浴介護の事業を行う者（以下「指定介護予防訪問入浴介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防訪問入浴介護事業所」という。）ごとに置くべき指定介護予防訪問入浴介護の提供に当たる従業者（以下この節から第五節までにおいて「介護予防訪問入浴介護従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 看護師又は准看護師（以下この章において「看護職員」という。） 一以上  
二 介護職員 一以上

2 前項の介護予防訪問入浴介護従業者のうち一人以上は、常勤の者でなければならない。  
3 指定介護予防訪問入浴介護事業者が、指定訪問入浴介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第三十四条第一項に規定する指定訪問入浴介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問入浴介護の事業と指定訪問入浴介護（指定居宅サービス等基準条例第三十三条に規定する指定訪問入浴介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第三十四条第一項及び第二項に規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第三十四条 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、指定介護予防訪問入浴介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防訪問入浴介護事業所の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防訪問入浴介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三節 設備に関する基準

第三十五条 指定介護予防訪問入浴介護事業所には、指定介護予防訪問入浴介護の事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の区画を設けるほか、指定介護予防訪問入浴介護の提供に必要な浴槽等の設備及び備品等を備えなければならない。

2 指定介護予防訪問入浴介護事業者が、指定訪問入浴介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問入浴介護の事業と指定訪問入浴介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第三十六条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。



#### 第四節 運営に関する基準

##### (利用料等の受領)

第三十六条 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防訪問入浴介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防訪問入浴介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防訪問入浴介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問入浴介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防訪問入浴介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、次に掲げる費用の額を支払う利用者から受けることができる。

一 利用者の選定により通常の事業の実施地域以外の地域に所在する居室において指定介護予防訪問入浴介護を提供する場合の当該提供に要する交通費

二 利用者の選定により提供される特別な浴槽水等に係る費用

4 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、前項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

##### (緊急時等の対応)

第三十七条 介護予防訪問入浴介護従業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供時に利用者に病状の急変が生じたときその他必要なときは、速やかに主治の医師又はあらかじめ当該指定介護予防訪問入浴介護事業者が定めた協力医療機関（協力を得ることができる医療機関をいう。以下同じ。）への連絡を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

##### (管理者の責務)

第三十八条 指定介護予防訪問入浴介護事業所の管理者は、当該指定介護予防訪問入浴介護事業所の従業者の管理及び指定介護予防訪問入浴介護の利用の申込みに係る調整、業務の実施状況の把握その他の管理を一元的に行うものとする。

2 指定介護予防訪問入浴介護事業所の管理者は、当該指定介護予防訪問入浴介護事業所の従業者にこの節及び次節に規定する事項を遵守させるため必要な指揮命令を行うものとする。

(運営規程)

第三十九条 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、指定介護予防訪問入浴介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防訪問入浴介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 指定介護予防訪問入浴介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 五 通常の事業の実施地域
- 六 サービスの利用に当たつての留意事項
- 七 緊急時等における対応方法
- 八 その他事業の運営についての重要事項

(準用)

第四十条 第九条から第十四条まで及び第二十一条から第二十四条までの規定は、指定介護予防訪問入浴介護の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第三十九条」と、「訪問介護員等」とあるのは「介護予防訪問入浴介護事業者」と読み替えるものとする。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防訪問入浴介護の基本的取扱方針)

第四十一条 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防訪問入浴介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防訪問入浴介護を提供しなければならぬ。

- 2 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、自らその提供する指定介護予防訪問入浴介護の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。
- 3 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目指すものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。
- 4 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めるものとし、利用者が有する能力を阻害することその他の不適切なサービスの提供を行わないよう配慮しなければならない。

(指定介護予防訪問入浴介護の具体的取扱方針)

第四十二条 指定介護予防訪問入浴介護は、第三十二条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第六項までに定めるところにより提供する。

2 介護予防訪問入浴介護従業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 介護予防訪問入浴介護従業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うものとする。

4 介護予防訪問入浴介護従業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供に当たっては、介護技術の進歩に対応し、適切な介護技術をもってサービスの提供を行うものとする。

5 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、一回の訪問につき、看護職員一人及び介護職員一人をもって指定介護予防訪問入浴介護を提供するものとし、これらの者のうち一人を当該指定介護予防訪問入浴介護の提供者の責任者とするものとする。ただし、利用者の身体が安定している場合その他入浴により当該利用者の身体の状態等に支障を生じることがおそれないと認められる場合は、その他主治の医師の意見を確認した上で、看護職員に代えて介護職員を充てることができる。

6 指定介護予防訪問入浴介護事業者は、指定介護予防訪問入浴介護の提供に当たっては、サービスの提供に用いる設備、器具及びその他の用品の使用に際して安全及び清潔の保持に留意し、特に利用者の身体に接触する設備、器具及びその他の用品については、サービスの提供ごとに消毒したものを使用するものとする。

#### 第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準

##### (従業者)

第四十三条 基準該当介護予防サービスに該当する介護予防訪問入浴介護又はこれに相当するサービス（以下「基準該当介護予防訪問入浴介護」という。）の事業を行う者（以下「基準該当介護予防訪問入浴介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「基準該当介護予防訪問入浴介護事業所」という。）ごとに置くべき基準該当介護予防訪問入浴介護の提供に当たる従業者（以下この節において「介護予防訪問入浴介護従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 看護職員 一以上

二 介護職員 一以上

2 基準該当介護予防訪問入浴介護の事業と基準該当訪問入浴介護（指定居宅サービス等基準条例第四十四条第一項に規定する基準該当訪問入浴介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合については、同項に規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第四十四条 基準該当介護予防訪問入浴介護事業者は、基準該当介護予防訪問介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、基準該当介護予防訪問入浴介護事業所の管理上支障がない場合は、当該基準該当介護予防訪問入浴介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

（設備及び備品等）

第四十五条 基準該当介護予防訪問入浴介護事業所には、基準該当介護予防訪問入浴介護事業の運営を行うために必要な広さの区画を設けるほか、基準該当介護予防訪問入浴介護の提供に必要な浴槽等の設備及び備品等を備えなければならない。

2 基準該当介護予防訪問入浴介護の事業と基準該当訪問入浴介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第四十六条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（準用）

第四十六条 第九条から第十四条まで、第二十一条、第二十二条、第二十三条（第五項及び第六項を除く。）及び第二十四条並びに第一節、第四節（第三十六条第一項及び第四十条を除く。）及び前節の規定は、基準該当介護予防訪問入浴介護の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第四十六条において準用する第三十九条」と、「訪問介護員等」とあるのは「介護予防訪問入浴介護従業者」と、第三十六条第二項中「法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問入浴介護」とあるのは「基準該当介護予防訪問入浴介護」と、同条第三項中「前二項」とあるのは「前項」と読み替えるものとする。

## 第五章 介護予防訪問看護

### 第一節 基本方針

第四十七条 指定介護予防サービスに該当する介護予防訪問看護（以下「指定介護予防訪

問看護」という。)の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、その療養生活を支援するとともに、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならぬ。

## 第二節 人員に関する基準

(従業者)

第四十八条 指定介護予防訪問看護の事業を行う者(以下「指定介護予防訪問看護事業者」という。)が当該事業を行う事業所(以下「指定介護予防訪問看護事業所」という。

(以下「指定介護予防訪問看護の提供に当たる従業者(以下「看護師等」という。))は、当該指定介護予防訪問看護事業所が病院又は診療所以外のもの(以下「指定介護予防訪問看護ステーション」という。)である場合には、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 保健師、看護師又は准看護師(以下この条において「看護職員」という。) 常勤換算方法で、二・五以上

二 理学療法士、作業療法士又は言語聴覚士 指定介護予防訪問看護ステーションの実情に応じた適当数

2 指定介護予防訪問看護事業者が指定介護予防訪問看護事業所ごとに置くべき看護師等は、当該指定介護予防訪問看護事業所が病院又は診療所であるもの(以下「指定介護予防訪問看護を担当する医療機関」という。)である場合には、看護職員とし、その員数は、適当数とする。

3 第一項第一号の看護職員のうち一人は、常勤の者でなければならない。

4 指定介護予防訪問看護事業者が、指定訪問看護事業者(指定居宅サービス等基準条例第四十九条第一項に規定する指定訪問看護事業者をいう。以下同じ。)の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問看護の事業と指定訪問看護(指定居宅サービス等基準条例第四十八条に規定する指定訪問看護をいう。以下同じ。)の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第四十九条第一項から第三項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(管理者)

第四十九条 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護ステーションごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

- 3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防訪問看護ステーションの管理上支障がない場合は、当該指定介護予防訪問看護ステーションの従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。
- 4 第一項の管理者は、保健師又は看護師でなければならない。ただし、やむを得ない理由がある場合は、この限りでない。
- 5 第一項の管理者は、適切な指定介護予防訪問看護を行うために必要な知識及び技能を有する者でなければならない。

### 第三節 設備に関する基準

第五十条 指定介護予防訪問看護ステーションには、指定介護予防訪問看護の事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の事務室（利用申込みの受付、相談等のための設備を含む。）を設けなければならない。ただし、当該指定介護予防訪問看護ステーションの同一敷地内に他の事業所、施設等がある場合は、指定介護予防訪問看護の事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の区画を設けることで足りる。

- 2 前項に定めるもののほか、指定介護予防訪問看護ステーションには、指定介護予防訪問看護の提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。
- 3 指定介護予防訪問看護を担当する医療機関には、指定介護予防訪問看護の事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の当該事業の用に供する区画を設けるとともに、指定介護予防訪問看護の提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。
- 4 指定介護予防訪問看護事業者が、指定訪問看護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問看護の事業と指定訪問看護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第五十一条第一項から第三項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第四節 運営に関する基準

#### （サービス提供困難時の対応）

第五十一条 指定介護予防訪問看護事業者は、利用申込者の病状、当該指定介護予防訪問看護事業所の通常の事業の実施地域等を勘案し、自ら適切な指定介護予防訪問看護を提供することが困難であると認めた場合は、主治の医師及び介護予防支援事業者への連絡を行い、適当な他の指定介護予防訪問看護事業者等を紹介する等の必要な措置を速やかに講じなければならない。

#### （利用料等の受領）

第五十二条 指定介護予防訪問看護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防訪問看護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防訪問看護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防訪問看護事業者を支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防訪問看護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問看護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額及び当該指定介護予防訪問看護に係る介護予防サービス費用基準額と、当該指定介護予防訪問看護に相当する健康保険法（大正十一年法律第七十号）第六十三条第一項に規定する療養の給付若しくは同法第八十八条第一項に規定する指定訪問看護又は高齢者の医療の確保に関する法律（昭和五十七年法律第八十号）第六十四条第一項に規定する療養の給付若しくは同法第七十八条第一項に規定する指定訪問看護に要する費用の額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防訪問看護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、利用者の選定により通常の事業の実施地域以外の地域に所在する居室において指定介護予防訪問看護を提供する場合は、当該提供に要した交通費の額の支払を利用者から受けることができる。

4 指定介護予防訪問看護事業者は、前項の交通費の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービス内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

（同居家族に対するサービス提供の禁止）

第五十三条 指定介護予防訪問看護事業者は、看護師等に、当該看護師等と同居している家族である利用者に対して指定介護予防訪問看護の提供をさせてはならない。

（緊急時等の対応）

第五十四条 看護師等は、指定介護予防訪問看護の提供時に利用者から病状の急変等が生じたときは、必要に応じて臨時応急の手当を行うとともに、速やかに主治の医師への連絡を行い指示を求めることその他の必要な措置を講じなければならない。

（運営規程）

第五十五条 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防訪問看護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

一 事業の目的及び運営の方針

- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 指定介護予防訪問看護の内容及び利用料その他の費用の額
- 五 通常の事業の実施地域
- 六 緊急時等における対応方法
- 七 その他事業の運営についての重要事項

(準用)

第五十六条 第九条、第十条、第十二条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで及び第三十八条の規定は、指定介護予防訪問看護の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第五十五条」と、「訪問介護員等」とあるのは「看護師等」と読み替えるものとする。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防訪問看護の基本的取扱方針)

第五十七条 指定介護予防訪問看護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防訪問看護の目標を設定し、計画的に指定介護予防訪問看護を提供しなければならない。

2 指定介護予防訪問看護事業者は、自らその提供する指定介護予防訪問看護の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防訪問看護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう適切な働きかけに努めなければならない。

(指定介護予防訪問看護の具体的取扱方針)

第五十八条 指定介護予防訪問看護は、第四十七条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十七項までに定めるところにより提供する。

2 看護師等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の病状及び心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確



に把握するものとする。

3 看護師等（准看護師を除く。以下この条（第七項から第十項までを除く。）において同じ。）は、前項に規定する利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防訪問看護の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防訪問看護計画書を作成し、主治の医師に提出しなければならない。

4 前項の介護予防訪問看護計画書は、当該計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

5 看護師等は、介護予防訪問看護計画書の作成に当たっては、その主要な事項について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 看護師等は、介護予防訪問看護計画書を作成した際には、当該介護予防訪問看護計画書を利用者に交付しなければならない。

7 看護師等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、主治の医師との密接な連携及び第三項に規定する介護予防訪問看護計画書に基づき、利用者の心身の機能の維持回復を図るよう妥当かつ適切に行うものとする。

8 看護師等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、療養上必要な事項について、理解しやすいように指導又は説明を行うものとする。

9 看護師等は、指定介護予防訪問介護の提供に当たっては、医学の進歩に対応し、適切な看護技術をもってサービスの提供を行うものとする。

10 看護師等は、特殊な看護等を行ってはならない。

11 看護師等は、介護予防訪問看護計画書に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防訪問看護計画書の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うものとする。

12 看護師等は、訪問日、利用者に提供した看護の内容等を記載した介護予防訪問看護報告書を作成し、当該報告書の内容について、当該利用者に係る介護予防サービス計画を作成した指定介護予防支援事業者に報告するとともに、当該報告書を主治の医師に定期的に提出しなければならない。

13 前項の介護予防訪問看護報告書は、当該報告書に係る利用者についてモニタリングが行われている場合は、当該モニタリングの結果を踏まえて作成されなければならない。

14 指定介護予防訪問看護事業所の管理者は、介護予防訪問看護計画書及び介護予防訪問

看護報告書の作成に関し、必要な指導及び管理を行わなければならない。

15 看護師等は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防訪問看護計画書の変更を行い、変更後の当該介護予防訪問看護計画書を主治の医師に提出しなければならない。

16 第二項から第十四項までの規定は、前項に規定する介護予防訪問看護計画書の変更に  
ついて準用する。

17 指定介護予防訪問看護事業所が指定介護予防訪問看護を担当する医療機関である場合には、介護予防訪問看護計画書及び介護予防訪問看護報告書の作成及び提出は、第三項、第四項、第十二項、第十三項及び第十五項の規定にかかわらず、診療録又はその他の診療に関する記録（以下「診療記録」という。）への記載をもって代えることができる。  
（主治の医師との関係）

第五十九条 指定介護予防訪問看護事業所の管理者は、主治の医師の指示に基づき適切な指定介護予防訪問看護が提供されるよう必要な管理をしなければならない。

2 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護の提供の開始に際し、主治の医師による指示を文書で受けなければならない。

3 指定介護予防訪問看護事業者は、指定介護予防訪問看護の提供に当たって主治の医師との密接な連携を図らなければならない。

4 指定介護予防訪問看護事業所が指定介護予防訪問看護を担当する医療機関である場合には、第二項に規定する主治の医師の文書による指示は、同項の規定にかかわらず、診療記録への記載をもって代えることができる。

## 第六章 介護予防訪問リハビリテーション

### 第一節 基本方針

第六十条 指定介護予防サービスに該当する介護予防訪問リハビリテーション（以下「指定介護予防訪問リハビリテーション」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の居宅において、理学療法、作業療法その他必要なリハビリテーションを行うことにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

### 第二節 人員に関する基準

第六十一条 指定介護予防訪問リハビリテーションの事業を行う者（以下「指定介護予防訪問リハビリテーション事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防訪問リハビリテーション事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、指定介護予

防訪問リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士又は言語聴覚士（以下この章において「理学療法士等」という。）とする。

- 2 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者が、指定訪問リハビリテーション事業者（指定居宅サービス等基準条例第六十三条第一項に規定する指定訪問リハビリテーション事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問リハビリテーションの事業と指定訪問リハビリテーション（指定居宅サービス等基準条例第六十二条に規定する指定訪問リハビリテーションをいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第六十三条第一項に規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第三節 設備に関する基準

第六十二条 指定介護予防訪問リハビリテーション事業所は、病院、診療所又は介護老人保健施設でなければならない。

- 2 指定介護予防訪問リハビリテーション事業所には、指定介護予防訪問リハビリテーションの事業の運営を行うために必要な広さを有する専用の区画を設けるとともに、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。

- 3 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者が、指定訪問リハビリテーション事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防訪問リハビリテーションの事業と指定訪問リハビリテーションの事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第六十四条第一項及び第二項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

##### （利用料等の受領）

第六十三条 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防訪問リハビリテーションを提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防訪問リハビリテーションに係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防訪問リハビリテーション事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

- 2 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防訪問リハビリテーションを提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額及び当該指定介護予防訪問リハビリテーションに係る介護予防サー

ビス費用基準額と、健康保険法第六十三条第一項又は高齢者の医療の確保に関する法律第六十四条第一項に規定する療養の給付のうち当該指定介護予防訪問リハビリテーションに相当するものに要する費用の額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、利用者の選定により通常の事業の実施地域以外の地域に所在する居宅において指定介護予防訪問リハビリテーションを提供する場合は、当該提供に要した交通費の額の支払を利用者から受けることができる。

4 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、前項の交通費の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

#### (運営規程)

第六十四条 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、指定介護予防訪問リハビリテーション事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防訪問リハビリテーションの事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 指定介護予防訪問リハビリテーションの利用料及びその他の費用の額
- 五 通常の事業の実施地域
- 六 その他事業の運営についての重要事項

#### (準用)

第六十五条 第九条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで及び第三十八条の規定は、指定介護予防訪問リハビリテーションの事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第六十四条」と、「訪問介護員等」とあるのは「理学療法士等」と読み替えるものとする。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

##### (指定介護予防訪問リハビリテーションの基本的取扱方針)

第六十六条 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防訪問リハビリテーションの目標を設定し、計画的にリハビリテーションを提供しなければならない。

2 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、自らその提供する指定介護予防訪問

リハビリテーションの質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防訪問リハビリテーション事業者は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者が主体的に当該事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

(指定介護予防訪問リハビリテーションの具体的取扱方針)

第六十七条 指定介護予防訪問リハビリテーションは理学療法士等が行うものとし、第六十条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十四項までに定めるところにより提供する。

2 理学療法士等は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の病状及び心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 医師及び理学療法士等は、前項に規定する利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防訪問リハビリテーションの目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防訪問リハビリテーション計画を作成するものとする。

4 前項の介護予防訪問リハビリテーション計画は、当該介護予防訪問リハビリテーション計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

5 医師又は理学療法士等は、介護予防訪問リハビリテーション計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 医師又は理学療法士等は、介護予防訪問リハビリテーション計画を作成した際には、当該介護予防訪問リハビリテーション計画を利用者に交付しなければならない。

7 理学療法士等は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に当たっては、医師の指示及び介護予防訪問リハビリテーション計画に基づき、利用者の心身の機能の維持回復を図り、日常生活の自立に資するよう、妥当かつ適切に行うものとする。

8 理学療法士等は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、リハビリテーションの観点から療養上必要とされる事項について、理解しやすいように指導又は説明を行うものとする。

9 理学療法士等は、指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に当たっては、介護技術の進歩に対応し、適切な介護技術をもってサービスの提供を行うものとする。

10 理学療法士等は、指定介護予防訪問リハビリテーションを提供した際には、利用者ごとに、介護予防訪問リハビリテーション計画に従ったサービスの実施状況及びその評価について、速やかに診療記録を作成するとともに、医師に報告するものとする。

11 医師又は理学療法士等は、介護予防訪問リハビリテーション計画に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防訪問リハビリテーション計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うものとする。

12 医師又は理学療法士等は、モニタリングの結果を記録し、当該記録を当該指定介護予防訪問リハビリテーションの提供に係る介護予防サービス計画を作成した指定介護予防支援事業者に報告しなければならない。

13 医師又は理学療法士等は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防訪問リハビリテーション計画の変更を行うものとする。

14 第二項から第十二項までの規定は、前項に規定する介護予防訪問リハビリテーション計画の変更について準用する。

## 第七章 介護予防居宅療養管理指導

### 第一節 基本方針

第六十八条 指定介護予防サービスに該当する介護予防居宅療養管理指導（以下「指定介護予防居宅療養管理指導」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、医師、歯科医師、薬剤師、看護職員（歯科衛生士が行う介護予防居宅療養管理指導に相当するものを行う保健師、看護師及び准看護師を除いた保健師、看護師又は准看護師をいう。以下この章において同じ。）、歯科衛生士（歯科衛生士が行う介護予防居宅療養管理指導に相当するものを行う保健師、看護師及び准看護師を含む。以下この章において同じ。）又は管理栄養士が、通院が困難な利用者に対して、その居宅を訪問して、利用者の心身の状況、置かれている環境等を

把握し、それらを踏まえて療養上の管理及び指導を行うことにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

## 第二節 人員に関する基準

第六十九条 指定介護予防居宅療養管理指導の事業を行う者（以下「指定介護予防居宅療養管理指導事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防居宅療養管理指導事業所」という。）ごとに置くべき従業者（以下この章において「介護予防居宅療養管理指導従業者」という。）は、当該指定介護予防居宅療養管理指導事業所が病院又は診療所である場合には、医師又は歯科医師及び薬剤師、看護職員、歯科衛生士又は管理栄養士とし、薬剤師、看護職員、歯科衛生士又は管理栄養士の員数は、提供する指定介護予防居宅療養管理指導の内容に応じた適当数とする。

2 指定介護予防居宅療養管理指導事業者が、指定介護予防居宅療養管理指導事業所ごとに置くべき介護予防居宅療養管理指導従業者は、当該指定介護予防居宅療養管理指導事業所が薬局である場合には、薬剤師とする。

3 指定介護予防居宅療養管理指導事業者が、指定介護予防居宅療養管理指導事業所ごとに置くべき介護予防居宅療養管理指導従業者は、当該指定介護予防居宅療養管理指導事業所が指定訪問看護ステーション等（指定訪問看護ステーション（指定居宅サービス等基準条例第四十九条第一項の指定訪問看護ステーションをいう。）及び指定介護予防訪問看護ステーションをいう。以下この章において同じ。）である指定介護予防居宅療養管理指導事業所の場合には、看護職員とする。

4 指定介護予防居宅療養管理指導事業者が、指定居宅療養管理指導事業者（指定居宅サービス等基準条例第七十二条第一項に規定する指定居宅療養管理指導事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防居宅療養管理指導の事業と指定居宅療養管理指導（指定居宅サービス等基準条例第七十一条に規定する指定居宅療養管理指導をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第七十二条第一項から第三項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

## 第三節 設備に関する基準

第七十条 指定介護予防居宅療養管理指導事業所は、病院、診療所、薬局又は指定訪問看護ステーション等であつて、指定介護予防居宅療養管理指導の事業の運営に必要な広さを有しているものでなければならない。

2 指定介護予防居宅療養管理指導事業所には、指定介護予防居宅療養管理指導の提供に必要な設備及び備品等を備えなければならない。

3 指定介護予防居宅療養管理指導事業者が、指定居宅療養管理指導事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防居宅療養管理指導の事業と指定居宅療養管理指導の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第七十三条第一項及び第二項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

##### (利用料等の受領)

第七十一条 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防居宅療養管理指導を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防居宅療養管理指導に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防居宅療養管理指導事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防居宅療養管理指導を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額及び当該指定介護予防居宅療養管理指導に係る介護予防サービス費用基準額と、健康保険法第六十三条第一項又は高齢者の医療の確保に関する法律第六十四条第一項に規定する療養の給付のうち当該指定介護予防居宅療養管理指導に相当するものに要する費用の額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、指定介護予防居宅療養管理指導の提供に要する交通費の額の支払を利用者から受けることができる。

4 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、前項の交通費の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

##### (運営規程)

第七十二条 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、指定介護予防居宅療養管理指導事業ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防居宅療養管理指導の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

#### 一 事業の目的及び運営の方針

#### 二 従業者の職種、員数及び職務の内容



三 営業日及び営業時間

四 指定介護予防居宅療養管理指導の種類及び利用料その他の費用の額

五 その他事業の運営についての重要事項

(準用)

第七十三条 第九条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで及び第三十八条の規定は、指定介護予防居宅療養管理指導の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第七十二条」と、「訪問介護員等」とあるのは「介護予防居宅療養管理指導従業者」と読み替えるものとする。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防居宅療養管理指導の基本的取扱方針)

第七十四条 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防居宅療養管理指導の目標を設定し、計画的に指定介護予防居宅療養管理指導を提供しなければならない。

2 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、自らその提供する指定介護予防居宅療養管理指導の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、指定介護予防居宅療養管理指導の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防居宅療養管理指導事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

(指定介護予防居宅療養管理指導の具体的取扱方針)

第七十五条 医師又は歯科医師が行う指定介護予防居宅療養管理指導は、第六十八条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次に掲げるところにより提供する。

一 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、訪問診療等により常に利用者の病状及び心身の状況を把握しつつ、計画的かつ継続的な医学的管理又は歯科医学的管理に基づいて、介護予防支援事業者等に対する介護予防サービス計画の作成等に必要な情報提供並びに利用者又はその家族に対する介護予防サービスの利用に関する留意事項、介護方法等についての指導、助言等を行うものとする。

二 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、利用者又はその家族からの介護に関する相談に懇切丁寧に応じるとともに、利用者又はその家族に対し、療養上必

要な事項等について、理解しやすいように指導又は助言を行うものとする。

三 前号に規定する指導又は助言に際しては、療養上必要な事項等を記載した文書を交付するよう努めなければならないこと。

四 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、療養上適切な介護予防サービスが提供されるために必要があると認める場合又は介護予防支援事業者若しくは介護予防サービス事業者から求めがあった場合は、介護予防支援事業者又は介護予防サービス事業者に対し、介護予防サービス計画の作成、介護予防サービスの提供等に必要情報提供又は助言を行うものとする。

五 前号に規定する介護予防支援事業者又は介護予防サービス事業者に対する情報提供又は助言については、原則として、サービス担当者会議に参加することにより行わなければならないこと。

六 前号の規定によるサービス担当者会議への参加が困難な場合については、介護予防支援事業者又は介護予防サービス事業者に対して、原則として、情報提供又は助言の内容を記載した文書を交付しなければならないこと。

七 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に際し、利用者ごとに、提供した指定介護予防居宅療養管理指導の内容を、速やかに診療録に記録するものとする。

2 薬剤師、歯科衛生士又は管理栄養士が行う指定介護予防居宅療養管理指導は、第六十八条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、指定介護予防居宅療養管理指導を次に掲げるところにより提供する。

一 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、医師又は歯科医師の指示（薬局の薬剤師による指定介護予防居宅療養管理指導にあつては、医師又は歯科医師の指示に基づき当該薬剤師が策定した薬学的管理指導計画）に基づき、利用者の心身の機能の維持回復を図り、居宅における日常生活の自立に資するよう、妥当かつ適切に行うものとする。

二 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、療養上必要な事項について、理解しやすいように指導又は説明を行うものとする。

三 常に利用者の病状、心身の状況及び置かれている環境の確かな把握に努め、当該利用者に対し適切なサービスを提供するものとする。

四 指定介護予防居宅療養管理指導を提供した際に、利用者ごとに、提供した指定介護予防居宅療養管理指導の内容について、速やかに診療記録を作成するとともに、医師又は歯科医師に報告するものとする。

3 看護職員が行う指定介護予防居宅療養管理指導は、第六十八条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき次に掲げるところにより提供する。

一 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、介護予防支援事業者等に対する介護予防サービス計画の作成等に必要な情報提供並びに利用者に対する療養上の相談及び支援を行うものとする。

二 指定介護予防居宅療養管理指導の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、療養上必要な事項について、理解しやすいように指導又は助言を行うものとする。

三 指定介護予防居宅療養管理指導を提供した際に、利用者ごとに、提供した指定介護予防居宅療養管理指導の内容について、速やかに記録を作成するとともに、医師に報告し、及び介護予防支援事業者等に情報提供すること。

## 第八章 介護予防通所介護

### 第一節 基本方針

第七十六条 指定介護予防サービスに該当する介護予防通所介護（以下「指定介護予防通所介護」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、必要な日常生活上の支援及び機能訓練を行うことにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

### 第二節 人員に関する基準

（従業者）

第七十七条 指定介護予防通所介護の事業を行う者（以下「指定介護予防通所介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防通所介護事業所」という。

（ ）ごとに置くべき従業者（以下この節から第五節までにおいて「介護予防通所介護従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 生活相談員 指定介護予防通所介護の提供日ごとに、指定介護予防通所介護を提供している時間帯に生活相談員（専ら当該指定介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間数の合計を当該指定介護予防通所介護を提供している時間帯の時間数で除して得た数が一以上確保されるために必要な数

二 看護師又は准看護師（以下この章において「看護職員」という。） 指定介護予防通所介護の単位ごとに、専ら当該指定介護予防通所介護の提供に当たる看護職員の員数が一以上確保されるために必要な数

三 介護職員 指定介護予防通所介護の単位ごとに、当該指定介護予防通所介護を提供している時間帯に介護職員（専ら当該指定介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間数の合計数を当該指定介護予防通所介護を提供している時間数（次項において「提供単位時間数」という。）で除して得た数が、利用者（当該指定介護予防通所介護事業者が、指定通所介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第八十条第一項に規定する指定通所介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所介護の事業と指定通所介護（指定居宅サービス等基準条例第七十九条に規定する指定通所介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあつては、当該事業所における指定介護予防通所介護及び指定通所介護の利用者。以下この節及び次節において同じ。）の数が十五人までの場合にあつては一以上、十五人を超える場合にあつては十五人を超える部分の数を五で除して得た数に一を加えて得た数以上確保されるために必要な数

#### 四 機能訓練指導員 一以上

2 指定介護予防通所介護事業所の利用定員（当該指定介護予防通所介護事業所において同時に指定介護予防通所介護の提供を受けることができる利用者の数の上限をいう。以下この節から第四節までにおいて同じ。）が十人以下である指定介護予防通所介護事業所に置くべき看護職員及び介護職員の員数については、前項の規定にかかわらず、指定介護予防通所介護の単位ごとに、当該指定介護予防通所介護を提供している時間帯に看護職員又は介護職員（いずれも専ら当該指定介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間数の合計数を提供単位時間数で除して得た数が一以上確保されるために必要な数とすることができる。

3 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の単位ごとに、第一項第三号の介護職員（前項の規定の適用を受ける場合にあつては、同項の看護職員又は介護職員。次項及び第八項において同じ。）を、常時一人以上当該指定介護予防通所介護に従事させなければならない。

4 第一項及び第二項の規定にかかわらず、介護職員は、利用者の処遇に支障がない場合は、他の指定介護予防通所介護の単位の介護職員として従事することができるものとする。

5 前各項の指定介護予防通所介護の単位は、指定介護予防通所介護であつてその提供が同時に一又は複数の利用者に対して一体的に行われるものをいう。

6 第一項第四号の機能訓練指導員は、日常生活を営むのに必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する者でなければならない。

7 第一項第四号の機能訓練指導員は、当該指定介護予防通所介護事業所の他の従業者の職務に従事することができるものとする。

8 第一項の生活相談員又は介護職員のうちいずれか一人以上は、常勤の者でなければならない。

9 指定地域密着型介護老人福祉施設（指定地域密着型サービスに該当する地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護の事業を行う地域密着型介護老人福祉施設をいう。以下同じ。）に併設される指定介護予防通所介護事業所については、当該指定地域密着型介護老人福祉施設の生活相談員又は機能訓練指導員により当該指定介護予防通所介護事業所の利用者の処遇が適切に行われると認められるときは、当該指定介護予防通所介護事業所の生活相談員又は機能訓練指導員を置かないことができる。

10 指定介護予防通所介護事業者が、指定通所介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所介護の事業と指定通所介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第八十条第一項から第九項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第七十八条 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防通所介護事業所の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防通所介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三節 設備に関する基準

第七十九条 指定介護予防通所介護事業所は、食堂、機能訓練室、静養室、相談室及び事務室を設けるほか、指定介護予防通所介護の提供に必要なその他の設備及び備品等並びに消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を備えなければならない。

2 前項に定める設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じて当該各号に定めるところによる。

#### 一 食堂及び機能訓練室

イ 食堂及び機能訓練室は、それぞれ必要な広さを有すること。ただし、食事の提供及び機能訓練に支障がない広さを確保できる場合には、同一の場所とすることがで

きる。

ロ 食堂及び機能訓練室の合計した面積（食堂及び機能訓練室を同一の場所とする場合にあっては、当該同一の場所の面積）は、三平方メートルに利用定員を乗じて得た面積以上とすること。

二 相談室 遮蔽物の設置等により相談の内容が漏えいしないよう配慮されていること。

3 第一項に定める設備は、専ら当該指定介護予防通所介護の事業の用に供するものでなければならず。ただし、利用者に対する指定介護予防通所介護の提供に支障がない場合は、この限りでない。

4 指定介護予防通所介護事業者が、指定通所介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所介護の事業と指定通所介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第八十二条第一項から第三項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

##### （利用料の受領）

第八十条 指定介護予防通所介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防通所介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防通所介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防通所介護事業者を支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防通所介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防通所介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防通所介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防通所介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 利用者の選定により通常の事業の実施地域以外の地域に居住する利用者に対して行う送迎に要する費用

二 食事の提供に要する費用

三 おむつ代

四 前三号に掲げるもののほか、指定介護予防通所介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用

者に負担させることが適当と認められる費用

4 前項第二号に掲げる費用については、知事が定めるところによるものとする。

5 指定介護予防通所介護事業者は、第三項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

(運営規程)

第八十一条 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防通所介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 営業日及び営業時間
- 四 指定介護予防通所介護の利用定員
- 五 指定介護予防通所介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 六 通常の事業の実施地域
- 七 サービスの利用に当たっての留意事項
- 八 緊急時等における対応方法
- 九 非常災害対策
- 十 その他事業の運営についての重要事項

(定員の遵守)

第八十二条 指定介護予防通所介護事業者は、利用定員を超えて指定介護予防通所介護の提供を行ってはならない。ただし、災害その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

(非常災害対策)

第八十三条 指定介護予防通所介護事業者は、非常災害に対処するための具体的な計画を立て、非常災害時の関係機関への通報体制及び関係機関との連携体制を整備し、それらを定期的に従業者に周知するとともに、定期的に避難訓練、救出訓練その他必要な訓練を行わなければならない。

(準用)

第八十四条 第九条から第十四条まで、第十七条、第二十一条から第二十四条まで及び第三十八条の規定は、指定介護予防通所介護の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第八十一条」と、同条及び第十七条中「訪問介護員

等」とあるのは「介護予防通所介護従業者」と読み替えるものとする。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防通所介護の基本的取扱方針)

第八十五条 指定介護予防通所介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防通所介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防通所介護を提供しなければならぬ。

2 指定介護予防通所介護事業者は、自らその提供する指定介護予防通所介護の質の評価を行うとともに、主治の医師又は歯科医師とも連携を図りつつ、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供が、単に利用者の運動器の機能の向上、栄養状態の改善、口腔機能の向上等の特定の心身の機能に着目した改善を目的とするのではなく、利用者の心身の機能の改善等を通じて、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防通所介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者が主体的に当該事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

(指定介護予防通所介護の具体的取扱方針)

第八十六条 指定介護予防通所介護は、第七十六条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十三項までに定めるところにより提供する。

2 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、前項に規定する利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防通所介護の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防通所介護計画を作成するものとする。

4 前項の介護予防通所介護計画は、当該介護予防通所介護計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に



沿って作成されなければならない。

5 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、介護予防通所介護計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、介護予防通所介護計画を作成した際には、当該介護予防通所介護計画を利用者に交付しなければならない。

7 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たっては、前項の規定により交付した介護予防通所介護計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。

8 介護予防通所介護従業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うものとする。

9 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たっては、介護技術の進歩に対応し、適切な介護技術をもってサービスの提供を行うものとする。

10 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、介護予防通所介護計画に基づくサービスの提供の開始の時から、少なくとも一月に一回、当該介護予防通所介護計画に係る利用者の状態、当該利用者に対するサービスの提供状況等について、当該利用者に係る指定介護予防支援事業者に報告するものとする。

11 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、介護予防通所介護計画に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防通所介護計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うとともに、当該モニタリングの結果を記録し、当該記録を前項の指定介護予防支援事業者に報告しなければならない。

12 指定介護予防通所介護事業所の管理者は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防通所介護計画の変更を行うものとする。

13 第二項から第十一項までの規定は、前項に規定する介護予防通所介護計画の変更について準用する。

#### （安全管理体制等の確保）

第八十七条 指定介護予防通所介護事業者は、サービスの提供時に利用者に病状の急変等が生じた場合に備え、緊急時に対応する手順等を定めた手引（以下「緊急時の手引等」という。）を作成し、指定介護予防通所介護事業所の従業者への周知徹底を図るとともに、速やかに主治の医師への連絡を行うことができるよう、緊急時の連絡方法をあらかじめ

じめ定めておかなければならない。

2 指定介護予防通所介護事業者は、指定介護予防通所介護の提供に当たっては、利用者の転倒等を防止するための環境整備に努めなければならない。

3 指定介護予防通所介護事業者は、サービスの提供に当たっては、事前に利用者の脈拍及び血圧等を測定する等利用者の当日の体調を確認するとともに、提供するサービスの内容を利用者にとって無理のない適度なものとしよう努めなければならない。

4 指定介護予防通所介護事業者は、サービス提供時における利用者の体調の変化に常に留意し、病状の急変等が生じたときその他必要なときは、速やかに主治の医師への連絡を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

#### 第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準

(従業者)

第八十八条 基準該当介護予防サービスに該当する介護予防通所介護又はこれに相当するサービス（以下「基準該当介護予防通所介護」という。）の事業を行う者（以下「基準該当介護予防通所介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「基準該当介護予防通所介護事業所」という。）ごとに置くべき従業者（以下この節において「介護予防通所介護従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 生活相談員 基準該当介護予防通所介護の提供日ごとに、当該基準該当介護予防通所介護を提供している時間帯に生活相談員（専ら当該基準該当介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間帯の合計数を当該基準該当介護予防通所介護を提供している時間帯の時間数で除して得た数が一以上確保されるために必要な数

二 看護職員 基準該当介護予防通所介護の単位ごとに、専ら当該基準該当介護予防通所介護の提供に当たる看護職員が一以上確保されるために必要な数

三 介護職員 基準該当介護予防通所介護の単位ごとに、当該基準該当介護予防通所介護を提供している時間帯に介護職員（専ら当該基準該当介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間帯の合計数を当該基準該当介護予防通所介護を提供している時間数（次項において「提供単位時間数」という。）で除して得た数が、利用者（当該基準該当介護予防通所介護事業者が、基準該当介護予防通所介護の事業と基準該当通所介護（指定居宅サービス等基準条例第六条第一項に規定する基準該当通所介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、当該事業所における基準該当介護予防通所介護及び基準該当通所介護

の利用者。以下この節において同じ。）の数が十五人までの場合にあつては一以上、十五人を超える場合にあつては十五人を超える部分の数を五で除して得た数に一を加えて得た数以上確保されるために必要な数

#### 四 機能訓練指導員 一以上

2 基準該当介護予防通所介護事業所の利用定員（当該基準該当介護予防通所介護事業所において同時に基準該当介護予防通所介護の提供を受けることができる利用者の数の上限をいう。以下この節において同じ。）が十人以下である基準該当介護予防通所介護事業所に置くべき看護職員及び介護職員の員数については、前項の規定にかかわらず、基準該当介護予防通所介護の単位ごとに、当該基準該当介護予防通所介護を提供している時間帯に看護職員又は介護職員（いずれも専ら当該基準該当介護予防通所介護の提供に当たる者に限る。）が勤務している時間数の合計数を提供単位時間数で除して得た数が一以上確保されるために必要な数とすることができる。

3 基準該当介護予防通所介護事業者は、基準該当介護予防通所介護の単位ごとに、第一項第三号の介護職員（前項の規定の適用を受ける場合にあつては、同項の看護職員又は介護職員。次項において同じ。）を、常時一人以上当該基準該当介護予防通所介護に従事させなければならない。

4 第一項及び第二項の規定にかかわらず、介護職員は、利用者の処遇に支障がない場合は、当該基準該当通所介護事業所における他の基準該当介護予防通所介護の単位の介護職員として従事することができるものとする。

5 前各項の基準該当介護予防通所介護の単位は、基準該当介護予防通所介護であつてその提供が同時に一又は複数の利用者に対して一体的に行われるものをいう。

6 第一項第四号の機能訓練指導員は、日常生活を営むのに必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する者でなければならない。

7 第一項第四号の機能訓練指導員は、当該基準該当介護予防通所介護事業所の他の従業者の職務に従事することができるものとする。

8 基準該当介護予防通所介護の事業と基準該当通所介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第百六条第一項から第七項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもつて、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（管理者）

第八十九条 基準該当介護予防通所介護事業者は、基準該当介護予防通所介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、基準該当介護予防通所介護事業所の管理上支障がない場合は、当該基準該当介護予防通所介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

(設備及び備品等)

第九十条 基準該当介護予防通所介護事業所には、食事を行う場所、機能訓練を行う場所、静養のための場所、生活相談のための場所、事務及び連絡のための場所を設けるとともに、消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備並びに基準該当介護予防通所介護の提供に必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。

2 前項に定める設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じて当該各号に定めるところによる。

一 食事を行う場所及び機能訓練を行う場所

イ 食事を行う場所及び機能訓練を行う場所は、それぞれ必要な広さを有すること。

ただし、食事の提供及び機能訓練の実施に支障がない広さを確保できる場合にあっては、同一の場所とすることができる。

ロ 食事を行う場所及び機能訓練を行う場所の合計した面積（食事を行う場所及び機能訓練を行う場所を同一の場所とする場合にあっては、当該同一の場所の面積）は、三平方メートルに利用定員を乗じて得た面積以上とすること。

二 生活相談を行う場所 遮蔽物の設置等により相談の内容が漏えいしないよう配慮されていること。

3 第一項に掲げる設備は、専ら当該基準該当介護予防通所介護の事業の用に供するものでなければならない。ただし、利用者に対する基準該当介護予防通所介護の提供に支障がない場合は、この限りでない。

4 基準該当介護予防通所介護の事業と基準該当通所介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第八十一条から第三項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(準用)

第九十一条 第九条から第十四条まで、第十七条、第二十一条、第二十二条、第二十三条（第五項及び第六項を除く。）、第二十四条及び第三十八条並びに第一節、第四節（第八十条第一項及び第八十四条を除く。）及び前節の規定は、基準該当介護予防通所介護の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第九

十一条において準用する第八十一条」と、同条及び第十七条中「訪問介護員等」とあるのは「介護予防通所介護従業者」と、第八十条第二項中「法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防通所介護」とあるのは「基準該当介護予防通所介護」と、同条第三項中「前二項」とあるのは「前項」と読み替えるものとする。

## 第九章 介護予防通所リハビリテーション

### 第一節 基本方針

第九十二条 指定介護予防サービスに該当する介護予防通所リハビリテーション（以下「指定介護予防通所リハビリテーション」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、理学療法、作業療法その他必要なりハビリテーションを行うことにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

### 第二節 人員に関する基準

第九十三条 指定介護予防通所リハビリテーションの事業を行う者（以下「指定介護予防通所リハビリテーション事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防通所リハビリテーション事業所」という。）ごとに置くべき指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる従業者（以下「介護予防通所リハビリテーション従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 医師 指定介護予防通所リハビリテーションの提供に必要な一以上の数
- 二 理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は看護師若しくは准看護師（以下この章において「看護職員」という。）若しくは介護職員 次に掲げる基準を満たすために必要な数

イ 指定介護予防通所リハビリテーションの単位ごとに、利用者（当該指定介護予防通所リハビリテーション事業者が、指定通所リハビリテーション事業者（指定居宅サービス等基準条例第百十一条第一項に規定する指定通所リハビリテーション事業者（指定居宅者）をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所リハビリテーションの事業と指定通所リハビリテーション（指定居宅サービス等基準条例第百十条に規定する指定通所リハビリテーションをいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業所における指定介護予防通所リハビリテーション及び指定通所リハビリテーションの利用者。以下この節及び次節において同じ。）の数が十人以下の場合にあっては当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供を行う時間帯（以下この条において「提供時間」という。

）を通じて専ら当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は看護職員若しくは介護職員の員数が一以上、利用者の数が十人を超える場合にあつては提供時間を通じて専ら当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は看護職員若しくは介護職員の員数が、利用者の数を十で除して得た数以上確保されること。

ロ イに規定する介護予防通所介護従業者のうち専らリハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士又は言語聴覚士の員数が、利用者の数が百又はその端数を増すごとに一以上確保されること。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業所が診療所である場合の当該指定介護予防通所リハビリテーション事業所に置くべき前項第二号に規定する介護予防通所リハビリテーション従業者の員数については、前項の規定にかかわらず、次に掲げる基準を満たすために必要な数とすることができる。

一 指定介護予防通所リハビリテーションの単位ごとに、利用者の数が十人以下の場合にあつては提供時間を通じて専ら当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は看護職員若しくは介護職員の員数が一以上、利用者の数が十人を超える場合にあつては提供時間を通じて専ら当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は看護職員若しくは介護職員の員数が、利用者の数を十で除して得た数以上確保されること。

二 前号に規定する介護予防通所リハビリテーション従業者のうち専ら当該指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる理学療法士、作業療法士若しくは言語聴覚士又は介護予防通所リハビリテーション若しくはこれに類するサービスに一年以上従事した経験を有する看護師の員数が、常勤換算方法で、○・一以上確保されること。

3 第一項第一号の医師は、常勤の者でなければならない。

4 指定介護予防通所リハビリテーション事業者が、指定通所リハビリテーション事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所リハビリテーションの事業と指定通所リハビリテーションの事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第一百十一条第一項から第三項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第三節 設備に関する基準

第九十四条 指定介護予防通所リハビリテーション事業所には、指定介護予防通所リハビ

リテーションを行うのにふさわしい専用の部屋等であつて、その面積が三平方メートルに利用定員（当該指定介護予防通所リハビリテーション事業所において同時に指定介護予防通所リハビリテーションの提供を受けることができる利用者の数の上限をいう。以下この節及び次節において同じ。）を乗じて得た面積以上の広さを有するものを設けなければならない。この場合において、当該指定介護予防通所リハビリテーション事業所が介護老人保健施設であるときは、当該専用の部屋等の面積として利用者のために確保されている食堂（リハビリテーションに供用されるものに限る。）の面積を算入するものとする。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業所には、消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備並びに指定介護予防通所リハビリテーションを行うために必要な専用の機械及び器具を備えなければならない。

3 指定介護予防通所リハビリテーション事業者が、指定通所リハビリテーション事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防通所リハビリテーションの事業と指定通所リハビリテーションの事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第一百二十二条第一項及び第二項に規定する設備に関する基準を満たすことをもつて、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

##### （管理者等の責務）

第九十五条 指定介護予防通所リハビリテーション事業所の管理者は、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士又は専ら指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる看護師のうちから選任した者に、必要に応じて管理の代行をさせることができる。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業所の管理者（前項の規定により管理を代行する者を含む。）は、当該指定介護予防通所リハビリテーション事業所の従業者にこの節及び次節に規定する事項を遵守させるため必要な指揮命令を行うものとする。

##### （運営規程）

第九十六条 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーション事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防通所リハビリテーションの事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

一 事業の目的及び運営の方針

二 従業者の職種、員数及び職務の内容

三 営業日及び営業時間

四 指定介護予防通所リハビリテーションの利用定員

- 五 指定介護予防通所リハビリテーションの内容及び利用料その他の費用の額
- 六 通常の事業の実施地域
- 七 サービスの利用に当たつての留意事項
- 八 非常災害対策

九 その他事業の運営についての重要事項  
(準用)

第九十七条 第九条から第十四条まで、第十七条、第二十一条から第二十四条まで、第八十条、第八十二条及び第八十三条の規定は、指定介護予防通所リハビリテーションの事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第九十六条」と、同条及び第十七条中「訪問介護員等」とあるのは「介護予防通所リハビリテーション従業者」と読み替えるものとする。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防通所リハビリテーションの基本的取扱方針)

第九十八条 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防通所リハビリテーションの目標を設定し、計画的に指定介護予防通所リハビリテーションを提供しなければならない。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、自らその提供する指定介護予防通所リハビリテーションの質の評価を行うとともに、主治の医師又は歯科医師とも連携を図りつつ、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供が、単に利用者の運動器の機能の向上、栄養状態の改善、口腔機能の向上等の特定の心身の機能に着目した改善等を目的とするものではなく、利用者の心身の機能の改善等を通じて、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者が主体的に当該指定介護予防通所リハビリテーション事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。



(指定介護予防通所リハビリテーションの具体的取扱方針)

第九十九条 指定介護予防通所リハビリテーションは、第九十二条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十三項までに定めるところにより提供する。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の病状及び心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 医師及び理学療法士、作業療法士その他専ら指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たる介護予防通所リハビリテーション従業者（以下この節において「医師等の従業者」という。）は、利用者の診療又は運動機能の検査、作業能力の検査等の結果をもとに、共同して、当該利用者の心身の状況、希望及び置かれている環境等を踏まえて、指定介護予防通所リハビリテーションの目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防通所リハビリテーション計画を作成しなければならない。

4 前項の介護予防通所リハビリテーション計画は、当該介護予防通所リハビリテーション計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

5 医師等の従業者は、介護予防通所リハビリテーション計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 医師等の従業者は、介護予防通所リハビリテーション計画を作成した際には、当該介護予防通所リハビリテーション計画を利用者に交付しなければならない。

7 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たっては、前項の規定により交付した介護予防通所リハビリテーション計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。

8 介護予防通所リハビリテーション従業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、リハビリテーションの観点から療養上必要とされる事項について、理解しやすいように指導又は説明を行うものとする。

9 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たっては、介護技術の進歩に対応し、適切な介護技術をもってサービスの

提供を行うものとする。

10 医師等の従業者は、介護予防通所リハビリテーション計画に基づくサービスの提供の開始の時から、少なくとも一月に一回、当該介護予防通所リハビリテーション計画に係る利用者の状態、当該利用者に対するサービスの提供状況等について、当該サービスの提供に係る介護予防サービス計画を作成した指定介護予防支援事業者に報告するものとする。

11 医師等の従業者は、介護予防通所リハビリテーション計画に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防通所リハビリテーション計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うとともに、当該モニタリングの結果を記録し、当該記録を前項の指定介護予防支援事業者に報告しなければならない。

12 医師等の従業者は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防通所リハビリテーション計画の変更を行うものとする。

13 第二項から第十一項までの規定は、前項に規定する介護予防通所リハビリテーション計画の変更について準用する。

（安全管理体制等の確保）

第百条 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、サービスの提供時に利用者に病状の急変等が生じた場合に備え、緊急時の手引等を作成し、指定介護予防通所リハビリテーション事業所の従業者への周知徹底を図るとともに、速やかに主治の医師への連絡を行うことができるよう、緊急時の連絡方法をあらかじめ定めておかなければならない。

2 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、指定介護予防通所リハビリテーションの提供に当たり、利用者の転倒等を防止するための環境整備に努めなければならない。

3 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、サービスの提供に当たっては、事前に利用者の脈拍及び血圧等を測定する等利用者の当日の体調を確認するとともに、提供するサービスの内容を利用者にとって無理のない適度なものとするよう努めなければならない。

4 指定介護予防通所リハビリテーション事業者は、サービス提供時における利用者の体調の変化に常に留意し、病状の急変等が生じたときその他必要なときには、速やかに主治の医師への連絡を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

## 第十章 介護予防短期入所生活介護

### 第一節 基本方針

第百一条 指定介護予防サービスに該当する介護予防短期入所生活介護（以下「指定介護

予防短期入所生活介護」という。)の事業は、利用者が可能な限りその居室において、自立した日常生活を営むことができるよう、入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の支援及び機能訓練を行うことにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

## 第二節 人員に関する基準

(従業者)

第百二条 指定介護予防短期入所生活介護の事業を行う者(以下「指定介護予防短期入所生活介護事業者」という。)が当該事業を行う事業所(以下「指定介護予防短期入所生活介護事業所」という。)ごとに置くべき指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たる従業者(以下この節から第六節までにおいて「介護予防短期入所生活介護従業者」という。)は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 医師 一以上
- 二 生活相談員 常勤換算方法で、利用者の数が百又はその端数を増すごとに一以上
- 三 介護職員又は看護師若しくは准看護師(以下この章において「看護職員」という。)  
常勤換算方法で、利用者の数が三又はその端数を増すごとに一以上
- 四 栄養士 一以上
- 五 機能訓練指導員 一以上
- 六 調理員その他の従業者 当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の実情に応じた  
適当数

2 前項第四号の栄養士は、前項の規定にかかわらず、利用定員(当該指定介護予防短期入所生活介護事業所において同時に指定介護予防短期入所生活介護の提供を受けることができる利用者(当該指定介護予防短期入所生活介護事業者が、指定短期入所生活介護事業者(指定居宅サービス等基準条例第百二十条第一項に規定する指定短期入所生活介護事業者をいう。以下同じ。))の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所生活介護の事業と指定短期入所生活介護(指定居宅サービス等基準条例第百十九条に規定する指定短期入所生活介護をいう。以下同じ。))の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあっては、当該事業所における指定介護予防短期入所生活介護及び指定短期入所生活介護の利用者。以下この節及び次節並びに第百十二条において同じ。))の数の上限をいう。以下この節から第四節までにおいて同じ。))が四十人を超えない指定介護予防短期入所生活介護事業所については、他の社会福祉施設等の栄養士との連携を図ることにより当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の効果的な運営を期待するこ

- とができる場合であつて、利用者の処遇に支障がないときは、置かないことができる。
- 3 特別養護老人ホーム（老人福祉法（昭和三十八年法律第百三十三号）第二十条の五に規定する特別養護老人ホームをいう。以下同じ。）であつて、その全部又は一部が入所者に利用されていない居室を利用して指定介護予防短期入所生活介護の事業を行うものに置くべき第一項各号に掲げる介護予防短期入所生活介護従業者の員数については、同項の規定にかかわらず、これらの介護予防短期入所生活介護従業者について利用者を当該特別養護老人ホームの入所者とみなした場合における同法に規定する特別養護老人ホームとして必要とされる員数が確保されるために必要な数以上とする。
- 4 第一項の利用者の数は、当該年度の前年度の平均値とする。ただし、新規に指定介護予防短期入所生活介護事業者の指定を受ける場合その他これによることができない場合は、推定数による。
- 5 特別養護老人ホーム、養護老人ホーム（老人福祉法第二十条の四に規定する養護老人ホームをいう。以下同じ。）、病院、診療所、介護老人保健施設、特定施設入居者生活介護、地域密着型特定施設入居者生活介護又は介護予防特定施設入居者生活介護の指定を受けている施設（以下この節及び次節において「特別養護老人ホーム等」という。）に併設される指定介護予防短期入所生活介護事業所であつて、当該特別養護老人ホーム等と一体的に運営が行われるもの（以下「併設事業所」という。）については、老人福祉法、医療法（昭和二十三年法律第二百五号）又は法に規定する特別養護老人ホーム等として必要とされる員数の従業者に加えて、第一項各号に掲げる介護予防短期入所生活介護従業者について、それぞれ当該各号に定める員数を確保するものとする。
- 6 第一項第二号の生活相談員のうち一人並びに同項第三号の介護職員及び看護職員のうちそれぞれ一人は、常勤の者でなければならない。ただし、利用定員が二十人未満である併設事業所の場合は、この限りでない。
- 7 第一項第五号の機能訓練指導員は、日常生活を営むのに必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する者でなければならない。
- 8 第一項第五号の機能訓練指導員は、指定介護予防短期入所生活介護事業所の他の従業者の職務に従事することができるものとする。
- 9 指定地域密着型介護老人福祉施設に併設される指定介護予防短期入所生活介護事業所においては、当該指定地域密着型介護老人福祉施設の医師により当該指定短期入所生活介護事業所の利用者の健康管理が適切に行われると認められるときは、当該指定短期入所生活介護事業所の医師を置かないことができる。
- 10 指定地域密着型介護老人福祉施設に併設される指定介護予防短期入所生活介護事業所

においては、当該指定地域密着型介護老人福祉施設の生活相談員、栄養士又は機能訓練指導員により当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の利用者の処遇が適切に行われると認められるときは、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の生活相談員、栄養士又は機能訓練指導員を置かないことができる。

11 指定介護予防短期入所生活介護事業者が、指定短期入所生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所生活介護の事業と指定短期入所生活介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第二百二十条第一項から第十項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(管理者)

第二百三条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防短期入所生活介護事業所の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

第三節 設備に関する基準

(利用定員)

第二百四条 指定介護予防短期入所生活介護事業所の利用定員は、二十人以上とする。ただし、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所が、第二百二条第三項の規定の適用を受ける特別養護老人ホームである場合には、この限りでない。

2 併設事業所の場合又は指定介護予防短期入所生活介護事業所（ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所）（第二百二十条に規定するユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所をいう。以下この項において同じ。）を除く。）とユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所とが併設され一体的に運営される場合であって、それらの利用定員の総数が二十人以上である場合は、前項本文の規定にかかわらず、その利用定員を二十人未満とすることができる。

3 指定地域密着型介護老人福祉施設に併設される指定介護予防短期入所生活介護事業所の入所定員は、当該指定地域密着型介護老人福祉施設の入所定員の数を上限とする。

4 指定介護予防短期入所生活介護事業者が、指定短期入所生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所生活介護の事業と指定短期入所生活介護の事業を

同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居室サービス等基準条例第二百二十二条第一項から第三項までに規定する利用定員の基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(設備及び備品等)

第二百五条 指定介護予防短期入所生活介護事業所の建物（利用者の日常生活のために使用しない附属の建物を除く。以下同じ。）は、耐火建築物（建築基準法（昭和二十五年法律第二百一号）第二条第九号の二に規定する耐火建築物をいう。以下同じ。）でなければならぬ。ただし、次の各号のいずれかの要件を満たす二階建て又は平屋建ての指定介護予防短期入所生活介護事業所の建物にあつては、準耐火建築物（同条第九号の三に規定する準耐火建築物をいう。以下同じ。）とすることができる。

一 居室、静養室その他の利用者が日常生活を営む場所（以下「居室等」という。）を二階及び地階のいずれにも設けていないこと。

二 居室等を二階に設けている場合であつて、次に掲げる要件の全てを満たすこと。

イ 当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の所在地を管轄する消防長（消防本部を置かない市町にあつては、市町長。以下同じ。）又は消防署長に照会し、又は協力を求めた上で、第百十三条において準用する第八十三条に規定する計画に利用者の円滑かつ迅速な避難を確保するために必要な事項を定めること。

ロ 第百十三条において準用する第八十三条に規定する訓練については、同条に規定する計画に従い、昼間及び夜間のそれぞれにおいて行うこと。

ハ 火災の際の避難、消火等の協力を得ることができるよう、地域住民等との連携体制（指定介護予防短期入所生活介護事業者と地域住民等との間で、火災の際の避難、消火等に関して連携等を確保するための体制をいう。以下同じ。）を整備すること。

三 居室等（居室及び静養室を除く。）を地階に設けている場合であつて、前号に掲げる要件の全てを満たすこと。

2 前項の規定にかかわらず、次の各号に掲げる要件のうちいずれかを満たす木造かつ平屋建ての指定介護予防短期入所生活介護事業所の建物については、知事が、火災予防、消火活動等に関し専門的知識を有する者の意見を聴いて、火災の際の利用者の安全性が確保されていると認めるときは、耐火建築物又は準耐火建築物とすることを要しない。

一 スプリンクラー設備の設置、天井等の内装材等への難燃性の材料の使用、調理室等火災が発生するおそれがある箇所における防火区画の設置等により、初期消火及び延焼の抑制に配慮した構造であること。

二 非常警報設備の設置等による火災の早期発見及び通報の体制が整備されており、円

滑な消火活動が可能なものであること。

三 避難口の増設、搬送を容易に行うために十分な幅員を有する避難路の確保等により、円滑な避難が可能な構造であり、かつ、避難訓練を頻繁に実施すること、第百二条の規定により置くべき介護予防短期入所生活介護従業者の員数を超える員数の介護予防短期入所生活介護従業者を置くこと等により、火災の際の円滑な避難が可能なものであること。

3 指定介護予防短期入所生活介護事業所には、次に掲げる設備（第一号に規定する居室にあつては、指定介護予防短期入所生活介護の事業の専用のものに限る。）を設けるとともに、指定介護予防短期入所生活介護を提供するために必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。ただし、他の社会福祉施設等の設備を利用することにより、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の効率的運営が可能であり、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の利用者の処遇に支障がない場合は、第二号から第四号まで、第七号、第九号、第十二号から第十五号までに掲げる設備を設けないことができる。

- 一 居室
- 二 食堂
- 三 機能訓練室
- 四 浴室
- 五 便所
- 六 洗面設備
- 七 医務室
- 八 静養室
- 九 面談室
- 十 介護職員室
- 十一 看護職員室
- 十二 調理室
- 十三 洗濯室又は洗濯場
- 十四 汚物処理室
- 十五 介護材料室

4 併設事業所の場合には、前項の規定にかかわらず、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の効率的運営が可能であり、かつ、当該併設事業所の利用者の処遇に支障がないときは、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所を併設する特別養護老人ホーム等の前項各号に掲げる設備（居室を除く。）を指定介護予防短期入所生活介護の事業の用

に供することができるものとする。

5 第百二条第三項の規定の適用を受ける特別養護老人ホームの場合には、第三項及び第七項第一号の規定にかかわらず、老人福祉法に規定する特別養護老人ホームとして必要とされる設備を有することと足りるものとする。

6 第三項各号に掲げる設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じて、当該各号に定めるところによる。

一 居室

イ 一の居室の定員は、四人以下とすること。

ロ 利用者一人当たりの床面積は、十・六五平方メートル以上とすること。

ハ 日照、採光、換気等利用者の保健衛生、防災等について十分考慮されたものとする。

二 食堂及び機能訓練室

イ 食堂及び機能訓練室は、それぞれ必要な広さを有すること。ただし、食事の提供及び機能訓練の実施に支障がない広さを確保できる場合には、同一の場所とすることができる。

ロ 食堂及び機能訓練室の合計した面積（食堂及び機能訓練室を同一の場所とする場合にあっては、当該同一の場所の面積）は、三平方メートルに利用定員を乗じて得た面積以上とすること。

三 浴室 要支援者の入浴に適したものとすること。

四 便所 要支援者の使用に適したものとすること。

五 洗面設備 要支援者の使用に適したものとすること。

7 前各項に規定するもののほか、指定介護予防短期入所生活介護事業所の構造及び設備の基準は、次に掲げるとおりとする。

一 廊下の幅は、一・八メートル以上（中廊下にあつては、二・七メートル以上）とすること。

二 廊下、便所その他必要な場所に常夜灯を設けること。

三 階段の傾斜を緩やかにすること。

四 消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を設けること。

五 居室等が二階以上の階にある場合は、一以上の傾斜路を設けること。ただし、エレベーターを設けるときは、この限りでない。

8 指定介護予防短期入所生活介護事業者が、指定短期入所生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所生活介護の事業と指定短期入所生活介護の事業を



同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第二百二十三条第一項から第七項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

(内容及び手続の説明及び同意)

第六十六条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供の開始に際し、あらかじめ、利用申込者又はその家族に対し、第一百一十一条に規定する重要事項に関する規程の概要、介護予防短期入所生活介護従業者の勤務の体制その他の利用申込者のサービスの選択に資すると認められる重要事項を、文書の交付その他規則で定める方法により明示して説明し、サービスの内容及び利用期間等について当該利用申込者の同意を得なければならない。

(指定介護予防短期入所生活介護の開始及び終了)

第七十七条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の心身の状況により、若しくはその家族の疾病、冠婚葬祭、出張等の理由により、又は利用者の家族の身体的及び精神的な負担の軽減等を図るために、一時的に居宅において日常生活を営むのに支障がある者を対象に、指定介護予防短期入所生活介護を提供するものとする。

2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、介護予防支援事業者その他保健医療サービス又は福祉サービスを提供する者との密接な連携により、指定介護予防短期入所生活介護の提供の終了後においても、提供前と同様に利用者が継続的に保健医療サービス又は福祉サービスを利用できるように、利用者に対し、提供の開始前から終了に至るまで必要な援助に努めなければならない。

(利用料等の受領)

第八十八条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防短期入所生活介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防短期入所生活介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防短期入所生活介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防短期入所生活介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防短期入所生活介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受け

る利用料のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 食事の提供に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者 に支給された場合は、同条第二項第一号に規定する食費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者 に代わり当該指定介護予防短期入所生活介護事業者 に支払われた場合は、同条第二項第一号に規定する食費の負担限度額）を限度とする。）

二 滞在に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者 に支給された場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者 に代わり当該指定介護予防短期入所生活介護事業者 に支払われた場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の負担限度額）を限度とする。）

三 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な居室の提供を行ったことに伴い必要となる費用

四 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な食事の提供を行ったことに伴い必要となる費用

五 送迎に要する費用（知事が定める場合を除く。）

六 理美容代

七 前各号に掲げるもののほか、指定介護予防短期入所生活介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用者 に負担させることが適当と認められるもの

4 前項第一号から第四号までに掲げる費用については、知事が定めるところによるものとする。

5 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、第三項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用を記した文書を交付して説明し、当該利用者の同意を得なければならない。この場合において、同項第一号から第四号までに掲げる費用に係る同意については、文書によるものとする。

（身体拘束等の禁止）

第九十九条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たっては、当該利用者又は他の利用者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他利用者の行動を制限する行為（以下「身体拘束等」という。）を行ってはならない。

2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、前項の身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由を記録しなければならない。

(緊急時等の対応)

第一百十条 介護予防短期入所生活介護従業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供時に利用者に病状の急変が生じたときその他必要なときは、速やかに主治の医師又はあらかじめ指定介護予防短期入所生活介護事業者が定めた協力医療機関への連絡を行うことその他の必要な措置を講じなければならない。

(運営規程)

第一百十一条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防短期入所生活介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。ただし、指定介護予防短期入所生活介護事業所が、第一百二条第三項の規定の適用を受ける特別養護老人ホームである場合は、第三号に規定する利用定員の記載を要しない。

一 事業の目的及び運営の方針

二 従業者の職種、員数及び職務の内容

三 利用定員

四 指定介護予防短期入所生活介護の内容及び利用料その他の費用の額

五 通常の送迎の実施地域（当該事業所が通常時に利用者の送迎を行う地域をいう。以下同じ。）

六 サービスの利用に当たつての留意事項

七 緊急時等における対応方法

八 非常災害対策

九 その他事業の運営についての重要事項

(定員の遵守)

第一百十二条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、次に掲げる利用者の数以上の利用者に対して同時に指定介護予防短期入所生活介護を行ってはならない。ただし、災害、虐待その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

一 第一百二条第三項の規定の適用を受ける特別養護老人ホームである指定介護予防短期入所生活介護事業所にあつては、利用者を当該特別養護老人ホームの入所者とみなした場合において、当該特別養護老人ホームの入所定員及び居室の定員を超えることとなる利用者の数

二 前号に該当しない指定介護予防短期入所生活介護事業所にあつては、利用定員及び居室の定員を超えることとなる利用者の数

(準用)

第百十三条 第十条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで、第三十八条及び第八十三条の規定は、指定介護予防短期入所生活介護の事業について準用する。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防短期入所生活介護の基本的取扱方針)

第百十四条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防短期入所生活介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防短期入所生活介護を提供しなければならない。

2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、自らその提供する指定介護予防短期入所生活介護の質の評価を行うとともに、主治の医師又は歯科医師とも連携を図りつつ、常にその質の改善を図らなければならない。

3 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供が、利用者ができる限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の様々な方法により、利用者が主体的に当該指定介護予防短期入所生活介護事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

(指定介護予防短期入所生活介護の具体的取扱方針)

第百十五条 指定介護予防短期入所生活介護は、第一百一条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第八項までに定めるところにより提供する。2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 指定介護予防短期入所生活介護事業所の管理者は、相当期間以上にわたり継続して入所することが予定される利用者については、前項に規定する利用者の日常生活全般の状

況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防短期入所生活介護の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防短期入所生活介護計画を作成するものとする。

4 前項の介護予防短期入所生活介護計画は、当該介護予防短期入所生活介護計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

5 指定介護予防短期入所生活介護事業所の管理者は、介護予防短期入所生活介護計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 指定介護予防短期入所生活介護事業所の管理者は、介護予防短期入所生活介護計画を作成した際には、当該介護予防短期入所生活介護計画を利用者に交付しなければならない。

7 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たっては、介護予防短期入所生活介護計画が作成されている場合には、当該介護予防短期入所生活介護計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。

8 介護予防短期入所生活介護従業者は、指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うものとする。

#### (介護)

第百十六条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の自立の支援及び日常生活の充実に資するよう、利用者の心身の状況に応じて、適切な技術をもって介護を行わなければならない。

2 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、一週間に二回以上、適切な方法により、利用者を入浴させ、又は清しきししなければならない。

3 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じて、適切な方法により、排せつの自立について必要な支援を行わなければならない。

4 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者のおむつを適切に取り替えなければならない。

5 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者に対し、前各項に定めるもののほか、離床、着替え、整容その他日常生活上の支援を適切に行わなければならない。

6 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、常時一人以上の介護職員を介護に従事させ

なければならない。

7 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者に対し、当該利用者への負担により、当該指定介護予防短期入所生活介護事業者の従業者以外の者による介護を受けさせてはならない。

#### (機能訓練)

第一百七十七条 指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の心身の状況等を踏まえ、必要に応じて日常生活を営むのに必要な生活機能の改善又は維持のための機能訓練を行わなければならない。

#### 第六節 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護に関する基準

##### 第一款 趣旨及び基本方針

#### (この節の趣旨)

第一百八十八条 第一節及び第三節から前節までの規定にかかわらず、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業（指定介護予防短期入所生活介護の事業であつて、指定短期入所生活介護事業所の全部において少数の居室及び当該居室に近接して設けられる共同生活室（当該居室の利用者が交流し、共同で日常生活を営むための場所をいう。以下この章において同じ。）により一体的に構成される場所（以下この章において「ユニット」という。）ごとに利用者の日常生活が営まれ、これに対する支援が行われるものをいう。以下同じ。）の基本方針並びに設備、運営及び介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準については、この節に定めるところによる。

#### (基本方針)

第一百九十条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業は、利用者一人一人の意思及び人格を尊重し、利用前の居室における生活と利用中の生活が連続したものとなるよう配慮しながら、各ユニットにおいて利用者が相互に社会的関係を築き、自律的な日常生活を営むことを支援することにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

##### 第二款 設備に関する基準

第二百二十条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業を行う者（以下「ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所」という。）の建物（利用者の日常生活のために使用しない附属の建物を除く。以下同じ。）は、耐火建築物でなければならない。ただし、次の各号のいずれかの要件を満たす二階建て又は平屋建てのユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の建物にあつては、準耐火建築物とすることがで

きる。

- 一 ユニット、浴室その他の利用者が日常生活を営む設備（以下「ユニット等」という。）を二階及び地階のいずれにも設けていないこと。
- 二 ユニット等を二階に設けている場合であつて、次に掲げる要件の全てを満たすこと。
  - イ 当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の所在地を管轄する消防長又は消防署長に照会し、又は協力を求めた上で、第二百二十六条において準用する第一百三条において準用する第八十三条に規定する計画に利用者の円滑かつ迅速な避難を確保するために必要な事項を定めること。
  - ロ 第二百二十六条において準用する第一百三条において準用する第八十三条に規定する訓練については、同条に規定する計画に従い、昼間及び夜間のそれぞれにおいて行うこと。
  - ハ 火災の際の避難、消火等の協力を得ることができるよう、地域住民等との連携体制（ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者と地域住民との間で、火災の際の避難、消火等の活動に関して連携等を確保するための体制をいう。）を整備すること。
  - ニ ユニット等（ユニットを除く。）を地階に設けている場合であつて、前号に掲げる要件の全てを満たすこと。
- 2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかの要件を満たす木造かつ平屋建てのユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の建物については、知事が、火災予防、消火活動等に関し専門的知識を有する者の意見を聴いて、火災の際の利用者の安全性が確保されていると認めるときは、耐火建築物又は準耐火建築物とすることを要しない。
  - 一 スプリンクラー設備の設置、天井等の内装材等への難燃性の材料の使用、調理室等火災が発生するおそれがある箇所における防火区画の設置等により、初期消火及び延焼の抑制に配慮した構造であること。
  - 二 非常警報設備の設置等による火災の早期発見及び通報の体制が整備されており、円滑な消火活動が可能なものであること。
  - 三 避難口の増設、搬送を容易に行うために十分な幅員を有する避難路の確保等により、円滑な避難が可能な構造であり、かつ避難訓練を頻繁に実施すること、第一百二条の規定により置くべき介護予防短期入所生活介護従業者の員数を超える員数の介護予防短期入所生活介護従業者を置くこと等により、火災の際の円滑な避難が可能なものであること。

3

ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所には、次に掲げる設備を設けると

もに、指定介護予防短期入所生活介護を提供するために必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。ただし、他の社会福祉施設等の設備を利用することにより、当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の効率的運営が可能であり、当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の利用者へのサービスの提供に支障がない場合は、第二号から第七号までに掲げる設備を設けないことができる。

一 ユニット

二 浴室

三 医務室

四 調理室

五 洗濯室又は洗濯場

六 汚物処理室

七 介護材料室

4 特別養護老人ホーム等に併設されるユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所であつて、当該特別養護老人ホーム等と一体的に運営が行われるもの（以下「併設ユニット型事業所」という。）については、前項の規定にかかわらず、当該併設ユニット型事業所の効率的運営が可能であり、かつ、当該併設ユニット型事業所の利用者に対するサービスの提供に支障がないときは、当該併設ユニット型事業所を併設する特別養護老人ホーム等の前項各号に掲げる設備（ユニットを除く。）をユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業の用に供することができるものとする。

5 第二条第三項の規定の適用を受けるユニット型特別養護老人ホーム（老人福祉法に基づく特別養護老人ホームの設備及び運営に関する基準を定める条例（平成二十四年広島県条例第八号）第二十五条に規定するユニット型特別養護老人ホームをいう。以下同じ。）の場合については、第三項及び第七項第一号の規定にかかわらず、ユニット型特別養護老人ホームとして必要とされる設備を有することにより足りるものとする。

6 第三項各号に掲げる設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じて、当該各号に定めるところによる。

一 ユニット

イ 居室

(1) 一の居室の定員は、一人とすること。ただし、利用者への指定介護予防短期入所生活介護の提供上必要と認められる場合は、二人とすることができる。

(2) 居室は、いずれかのユニットに属するものとし、当該ユニットの共同生活室に近接してこれと一体的に設けること。この場合において、一のユニットの利用定



員（当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所において同時にユニット型指定介護予防短期入所生活介護の提供を受けることができる利用者（当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者が、ユニット型指定短期入所生活介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第三十七条第一項に規定するユニット型指定短期入所生活介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業とユニット型指定短期入所生活介護の事業（指定居宅サービス等基準条例第三十五条に規定するユニット型指定短期入所生活介護の事業をいう。以下同じ。）を同一の事業所において一体的に運営する場合にあつては、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護及びユニット型指定短期入所生活介護の利用者。以下この条及び第二百五条において同じ。）の数の上限をいう。以下この節において同じ。）は、おおむね十人以上としなければならない。

(3) 利用者一人当たりの床面積は、十・六五平方メートル以上とすること。

(4) ユニットに属さない居室を改修したものについては、利用者相互の視線の遮断ができれば、居室を隔てる壁と天井との間に一定の隙間が生じても差し支えない。

(5) 日照、採光、換気等利用者の保健衛生、防災等について十分考慮されたものとする。

#### ロ 共同生活室

(1) 共同生活室は、いずれかのユニットに属するものとし、当該ユニットの利用者が交流し、共同で日常生活を営むための場所としてふさわしい形状を有すること。

(2) 一の共同生活室の床面積は、二平方メートルに当該共同生活室が属するユニットの利用定員を乗じて得た面積以上を標準とすること。

(3) 必要な設備及び備品を備えること。

#### ハ 洗面設備

(1) 居室ごとに設け、又は共同生活室ごとに適當数設けること。

(2) 要支援者の使用に適したものとすること。

#### ニ 便所

(1) 居室ごとに設け、又は共同生活室ごとに適當数設けること。

(2) 要支援者の使用に適したものとすること。

二 浴室 要支援者の入浴に適したものとすること。

7 前各項に規定するもののほか、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の構造及び設備の基準は、次に掲げるとおりとする。

- 一 廊下の幅は、一・八メートル以上（中廊下にあつては、二・七メートル以上）とすること。ただし、廊下の一部の幅を拡張することにより、利用者、従業者等の円滑な往来に支障が生じないと認められる場合には、一・五メートル以上（中廊下にあつては、一・八メートル以上）とすることができる。
- 二 廊下、共同生活室、便所その他必要な場所に常夜灯を設けること。
- 三 階段の傾斜を緩やかにすること。
- 四 消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を設けること。
- 五 ユニット又は浴室が二階以上の階にある場合は、一以上の傾斜路を設けること。ただし、エレベーターを設けるときは、この限りでない。

8 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者が、ユニット型指定短期入所生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業とユニット型指定短期入所生活介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、指定居室サービス等基準条例第三百三十七条第一項から第七項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### （準用）

第二百十一条 第四百条の規定は、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所について準用する。

#### 第三款 運営に関する基準

##### （利用料等の受領）

第二百十二条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防短期入所生活介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防短期入所生活介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防短期入所生活介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防短期入所生活介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、前二項の支払を受ける額のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 食事の提供に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予

防サービス費が利用者に支給された場合は、同条第二項第一号に規定する食費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者に代わり当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第一号に規定する食費の負担限度額）を限度とする。）

二 滞在に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者に支給された場合は、同条第二項第二号に規定する居住費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者に代わり当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の負担限度額）を限度とする。）

三 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な居室の提供を行ったことに伴い必要となる費用

四 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な食事の提供を行ったことに伴い必要となる費用

五 送迎に要する費用（知事が定める場合を除く。）

六 理美容代

七 前各号に掲げるもののほか、指定介護予防短期入所生活介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用者に負担させることが適当と認められるもの

4 前項第一号から第四号までに掲げる費用については、知事が定めるところによるものとする。

5 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、第三項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用を記した文書を交付して説明し、当該利用者の同意を得なければならぬ。この場合において、同項第一号から第四号までに掲げる費用に係る同意については、文書によるものとする。

（運営規程）

第二百二十三条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。ただし、当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所が、第二百二条第三項の規定の適用を受けるユニット型特別養護老人ホームである場合には、第三号に規定する利用定員及び第四号に規定するユニットの数及びユニットごとの利用定員の記載を要しない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 利用定員
- 四 ユニットの数及びユニットごとの利用定員
- 五 指定介護予防短期入所生活介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 六 通常の送迎の実施地域
- 七 サービスの利用に当たつての留意事項
- 八 緊急時等における対応方法
- 九 非常災害対策
- 十 その他事業の運営についての重要事項

(勤務体制の確保)

第二百二十四条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、従業者の勤務の体制を定めるに当たつては、次に掲げる職員配置を行わなければならない。

- 一 昼間については、ユニットごとに常時一人以上の介護職員又は看護職員を配置すること。
- 二 夜間及び深夜については、二ユニットごとに一人以上の介護職員又は看護職員を夜間及び深夜の勤務に従事する職員として配置すること。
- 三 ユニットごとに、常勤のユニットリーダーを配置すること。

2 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所ごとに、当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の従業者によってユニット型指定介護予防短期入所生活介護を提供しなければならない。ただし、利用者の処遇に直接影響を及ぼさない業務については、この限りでない。

(定員の遵守)

第二百二十五条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、次に掲げる利用者の数以上の利用者に対して同時に指定介護予防短期入所生活介護を行つてはならない。ただし、災害、虐待その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

- 一 第二条第三項の規定の適用を受けるユニット型特別養護老人ホームであるユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所にあつては、利用者を当該ユニット型特別養護老人ホームの入所者とみなした場合において、当該ユニット型特別養護老人ホームのユニットごとの入居定員及び居室の定員を超えることとなる利用者の数
- 二 前号に該当しないユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所にあつては、ユニットごとの利用定員及び居室の定員を超えることとなる利用者の数

(準用)

第二百二十六条 第六条、第七条、第九条、第十条及び第十三条の規定は、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業について準用する。この場合において、第六十条中「第一百一十一条」とあるのは「第二十三条」と読み替えるものとする。

第四款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の提供に当たつての留意事項)

第二百二十七条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者が、その有する能力に応じて、自らの生活様式及び生活習慣に沿って自律的な日常生活を営むことができるようにするため、利用者の日常生活上の活動について必要な援助を行うことにより、利用者の日常生活を支援するものとして指定介護予防短期入所生活介護を提供しなければならぬ。

2 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、各ユニットにおいて利用者がそれぞれの役割を持って生活を営むことができるよう配慮してユニット型指定介護予防短期入所生活介護を提供しなければならない。

3 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者のプライバシーの確保に配慮して指定介護予防短期入所生活介護を提供しなければならない。

(介護)

第二百二十八条 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、各ユニットにおいて利用者が相互に社会的関係を築き、自律的な日常生活を営むことを支援するよう、利用者の心身の状況等に応じ、適切な技術をもって介護を行わなければならない。

2 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者が、その心身の状況等に応じて、日常生活における家事を、それぞれの役割を持って行うよう適切に支援しなければならぬ。

3 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者が身体の清潔を維持し、精神的にも快適な生活を営むことができるよう、適切な方法により、利用者に入浴の機会を提供しなければならない。ただし、やむを得ない場合には、清しきを行うことをもって入浴の機会を提供に代えることができる。

4 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じて、適切な方法により、排せつの自立について必要な支援を行わなければならない。

5 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者については、排せつの自立を図りつつ、そのおむつを適切に取り替えなければならない。

6 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、前各項に定めるもののほか、利用者が行う離床、着替え、整容その他日常生活上の支援を適切に行わなければならない。

7 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、常時一人以上の介護職員を介護に従事させなければならない。

8 ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業者は、利用者に対し、当該利用者の負担により、当該ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所の従業者以外の者による介護を受けさせてはならない。

(準用)

第二百二十九条 第十四条、第十五条及び第十七条の規定は、ユニット型指定介護予防短期入所生活介護の事業について準用する。この場合において、第十五条中「第一条」とあるのは「第十九条」と、「前条」とあるのは「第二十九条において準用する前条」と読み替えるものとする。

第七節 基準該当介護予防サービスに関する基準

(指定介護予防通所介護事業所等の併設)

第三十条 基準該当介護予防サービスに該当する介護予防短期入所生活介護又はこれに相当するサービス(以下「基準該当介護予防短期入所生活介護」という。)の事業を行う者(以下「基準該当介護予防短期入所生活介護事業者」という。)が当該事業を行う事業所(以下「基準該当介護予防短期入所生活介護事業所」という。)は、指定介護予防通所介護事業所若しくは指定介護予防認知症対応型通所介護事業所(指定地域密着型介護予防サービスに該当する介護予防認知症対応型通所介護(以下「指定介護予防認知症対応型通所介護」という。)の事業を行う事業所をいう。)又は社会福祉施設(以下「指定介護予防通所介護事業所等」という。)に併設しなければならない。

(従業者)

第三十一条 基準該当介護予防短期入所生活介護事業者が基準該当介護予防短期入所生活介護事業所ごとに置くべき従業者(以下この節において「介護予防短期入所生活介護従業者」という。)は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。ただし、他の社会福祉施設等の栄養士との連携を図ることにより当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の効果的な運営を期待することができる場合であつて、利用者の処遇に支障がないときは、第三号の栄養士を置かないことができる。

一 生活相談員 一以上

二 介護職員又は看護職員 常勤換算方法で、利用者(当該基準該当介護予防短期入所

生活介護事業者が、基準該当介護予防短期入所生活介護の事業と基準該当短期入所生活介護（指定居宅サービス等基準条例第四十六条に規定する基準該当短期入所生活介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあっては、当該事業所における基準該当介護予防短期入所生活介護及び基準該当短期入所生活介護の利用者。以下この条及び第三百三十三条において同じ。）の数が三又はその端数を増すごとに一以上

三 栄養士 一以上

四 機能訓練指導員 一以上

五 調理員その他の従業者 当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の実情に応じた適当数

2 前項第二号の利用者の数は、当該年度の前年度の平均値とする。ただし、新規に基準該当介護予防短期入所生活介護の事業を開始する場合その他これによることのできない場合は、推定数による。

3 第一項第四号の機能訓練指導員は、日常生活を営むのに必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する者でなければならない。

4 第一項第四号の機能訓練指導員は、当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の他の従業者の職務に従事することができるものとする。

5 基準該当介護予防短期入所生活介護事業者は、法その他の法律に規定する指定介護予防通所介護事業所等として必要とされる員数の従業者に加えて、第一項各号に掲げる介護予防短期入所生活介護従業者について、それぞれ当該各号に定める員数を確保するものとする。

6 基準該当介護予防短期入所生活介護の事業と基準該当短期入所生活介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第四百七条第一項から第五項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(管理者)

第三百三十二条 基準該当介護予防短期入所生活介護事業者は、基準該当介護予防短期入所生活介護事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の管理上支障がない場合は、当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

(利用定員)

第一百三十三条 基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の利用定員(当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所において同時に基準該当介護予防短期入所生活介護の提供を受けることができる利用者の数の上限をいう。以下この節において同じ。)は二十人未満とする。

2 基準該当介護予防短期入所生活介護の事業と基準該当短期入所生活介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第四百九条第一項に規定する利用定員の基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

(設備及び備品等)

第三十四条 基準該当介護予防短期入所生活介護事業所には、次に掲げる設備(第一号に規定する居室にあつては、基準該当介護予防短期入所生活介護の事業の専用のものに限る。)を設けるとともに、基準該当介護予防短期入所生活介護を提供するために必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。ただし、指定介護予防通所介護事業所等の設備を利用することにより、当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の効率的運営が可能であり、当該基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の利用者の処遇に支障がない場合は、第二号から第九号までに掲げる設備を設けないことができる。

一 居室

二 食堂

三 機能訓練室

四 浴室

五 便所

六 洗面所

七 静養室

八 面接室

九 介護職員室

2 前項各号に掲げる設備の基準は、次の各号に掲げる設備の区分に応じて、当該各号に定めるところによる。

一 居室

イ 一の居室の定員は、四人以下とすること。

ロ 利用者一人当たりの床面積は、七・四三平方メートル以上とすること。

ハ 日照、採光、換気等利用者の保健衛生、防災等について十分考慮されたものとす



ること。

## 二 食堂及び機能訓練室

イ 食堂及び機能訓練室は、それぞれ必要な広さを有すること。ただし、食事の提供及び機能訓練の実施に支障がない広さを確保できる場合には、同一の場所とすることができるとができる。

ロ 食堂及び機能訓練室の合計した面積（食堂及び機能訓練室を同一の場所とする場合にあっては、当該同一の場所の面積）は、三平方メートルに利用定員を乗じて得た面積以上とすること。

三 浴室 身体の不自由な者の入浴に適したものとすること。

四 便所 身体の不自由な者の使用に適したものとすること。

五 洗面所 身体の不自由な者の使用に適したものとすること。

3 基準該当介護予防短期入所生活介護事業所の廊下幅は、利用者が車椅子で円滑に移動することが可能なものでなければならない。

4 基準該当介護予防短期入所生活介護の事業と基準該当短期入所生活介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合については、当該事業者は、指定居宅サービス等基準条例第五十条第一項から第三項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

（準用）

第三百三十五条 第十条から第十四条まで、第二十一条、第二十二条、第二十三条（第五項及び第六項を除く。）、第二十四条、第三十八条、第八十三条、第一百一条並びに第四節（第八十条第一項及び第一百三十三条を除く。）及び第五節の規定は、基準該当介護予防短期入所生活介護の事業について準用する。この場合において、第八十条第二項中「法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防短期入所生活介護」とあるのは「基準該当介護予防短期入所生活介護」と、同条第三項中「前二項」とあるのは「前項」と、第十五条中「第一百一条」とあるのは「第三百三十五条において準用する第一百一条」と、「前条」とあるのは「第三百三十五条において準用する前条」と読み替えるものとする。

## 第十一章 介護予防短期入所療養介護

### 第一節 基本方針

第三百三十六条 指定介護予防サービスに該当する介護予防短期入所療養介護（以下「指定介護予防短期入所療養介護」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、看護、医学的管理の下における介護及び機能訓練その他必要な医療並びに日常生活上の支援を行うことにより、利用者の療養

生活の質の向上及び心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

## 第二節 人員に関する基準

第三百三十七条 指定介護予防短期入所療養介護の事業を行う者（以下「指定介護予防短期入所療養介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防短期入所療養介護事業所」という。）ごとに置くべき指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たる従業者（以下「介護予防短期入所療養介護従業者」という。）は、当該指定介護予防短期入所療養介護事業所が介護老人保健施設である場合には、医師、薬剤師、看護職員（看護師及び准看護師をいう。以下この章において同じ。）、介護職員、支援相談員、理学療法士又は作業療法士及び栄養士とし、その員数は、それぞれ、利用者（当該指定介護予防短期入所療養介護事業者が、指定短期入所療養介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第五十三条第一項に規定する指定短期入所療養介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所療養介護の事業と指定短期入所療養介護（指定居宅サービス等基準条例第五十二条に規定する指定短期入所療養介護及び指定短期入所療養介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあっては、当該事業所における指定介護予防短期入所療養介護及び指定短期入所療養介護の利用者。以下この条及び第四百四十三条において同じ。）を当該介護老人保健施設の入所者とみなした場合における法に規定する介護老人保健施設として必要とされる員数が確保されるために必要な数以上とする。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者が、指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに置くべき介護予防短期入所療養介護従業者は、当該指定介護予防短期入所療養介護事業所が健康保険法等の一部を改正する法律（平成十八年法律第八十三号）附則第三百三十条の二第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第二十六条の規定による改正前の法（以下「平成十八年旧介護保険法」という。）第四十八条第一項第三号に規定する指定介護療養型医療施設（以下「指定介護療養型医療施設」という。）である場合には、医師、薬剤師、看護職員、介護職員、栄養士及び理学療法士又は作業療法士とし、その員数は、それぞれ、利用者を当該指定介護療養型医療施設の入院患者とみなした場合における平成十八年旧介護保険法に規定する指定介護療養型医療施設として必要とされる員数が確保されるために必要な数以上とする。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業者が、指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに置くべき介護予防短期入所療養介護従業者は、当該指定介護予防短期入所療養介護事業所が療養病床（医療法第七条第二項第四号に規定する療養病床をいう。以下同じ。）

を有する病院又は診療所（前項に該当するものを除く。）である場合には、医師、薬剤師、看護職員、介護職員（看護補助者をいう。）、栄養士及び理学療法士又は作業療法士とし、その員数は、それぞれ、同法に規定する療養病床を有する病院又は診療所として必要とされる員数が確保されるために必要な数以上とする。

4 指定介護予防短期入所療養介護事業者が指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに置くべき介護予防短期入所療養介護従業者は、当該指定介護予防短期入所療養介護事業所が診療所（前二項に該当するものを除く。）である場合には、当該指定介護予防短期入所療養介護を提供する病室に置くべき看護職員又は介護職員とし、その合計した員数は、常勤換算方法で、利用者及び入院患者の数が三又はその端数を増すごとに一以上とする。

5 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前項の指定介護予防短期入所療養介護事業所においては、夜間における緊急連絡体制を整備するとともに、夜間において看護職員又は介護職員を一人以上配置しなければならない。

6 指定介護予防短期入所療養介護事業者が、指定短期入所療養介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定短期入所療養介護の事業と指定介護予防短期入所療養介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居室サービス等基準条例第百五十三条第一項から第五項までに規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第三節 設備に関する基準

第百三十八条 指定介護予防短期入所療養介護事業所の設備に関する基準は、次の各号に掲げる指定介護予防短期入所療養介護事業所の区分に応じて、当該各号に定めるところによる。

一 介護老人保健施設である指定介護予防短期入所療養介護事業所 法に規定する介護老人保健施設として必要とされる施設及び設備（ユニット型介護老人保健施設（介護保険法に基づく介護老人保健施設の人員、施設及び設備並びに運営に関する基準を定める条例（平成二十四年広島県条例第十号。以下「介護老人保健施設基準条例」という。）第三十三条に規定するユニット型介護老人保健施設をいう。以下同じ。）に関するものを除く。）を有すること。

二 指定介護療養型医療施設である指定介護予防短期入所療養介護事業所 平成十八年旧介護保険法に規定する指定介護療養型医療施設として必要とされる設備（ユニット型指定介護療養型医療施設（介護保険法に基づく指定介護療養型医療施設の人員、設備及び運営に関する基準を定める条例（平成二十四年広島県条例第十一号。以下「介

「療養型医療施設基準条例」という。）第三十三条に規定するユニット型指定介護療養型医療施設をいう。以下同じ。）に関するものを除く。）を有すること。

三 療養病床を有する病院又は診療所（指定介護療養型医療施設であるものを除く。）である指定介護予防短期入所療養介護事業所 医療法に規定する療養病床を有する病院又は診療所として必要とされる設備を有すること。

四 診療所（療養病床を有するものを除く。）である指定介護予防短期入所療養介護事業所 次のイ、ロ及びハに掲げる基準を満たすこと。

イ 指定介護予防短期入所療養介護を提供する病室の床面積は、利用者一人につき六・四平方メートル以上とすること。

ロ 食堂及び浴室を有すること。

ハ 機能訓練を行うための場所を有すること。

2 前項第三号及び第四号に該当する指定介護予防短期入所療養介護事業所については、前項に定めるもののほか、消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を有するものとする。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業者が、指定短期入所療養介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定短期入所療養介護の事業と指定介護予防短期入所療養介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第一百五十四条第一項及び第二項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前二項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

（対象者）

第一百三十九条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の心身の状況若しくは病状により、若しくはその家族の疾病、冠婚葬祭、出張等の理由により、一時的に入所して看護、医学的管理の下における介護及び機能訓練その他必要な医療等を受ける必要がある者を対象に、介護老人保健施設の療養室、病院の療養病床に係る病室、診療所の指定介護予防短期入所療養介護を提供する病室又は病院の老人性認知症疾患療養病棟（健康保険法等の一部を改正する法律附則第三十条の二第一項の規定によりなおその効力を有するものとされた介護保険法施行令（平成十年政令第四百十二号）第四条第二項に規定する病床により構成される病棟をいう。以下同じ。）において指定介護予防短期入所療養介護を提供するものとする。

（利用料等の受領）

第四百十条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、法定代理受領サービ스에 該当する

指定介護予防短期入所療養介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防短期入所療養介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防短期入所療養介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防短期入所療養介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前二項の支払を受ける額のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 食事の提供に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者に支給された場合は、同条第二項第一号に規定する食費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者に代わり当該指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第一号に規定する食費の負担限度額）を限度とする。）

二 滞在に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者に支給された場合は、同条第二項第二号に規定する居住費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者に代わり当該指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の負担限度額）を限度とする。）

三 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な療養室及び病室（以下この章において「療養室等」という。）の提供を行ったことに伴い必要となる費用

四 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な食事の提供を行ったことに伴い必要となる費用

五 送迎に要する費用（知事が定める場合を除く。）

六 理美容代

七 前各号に掲げるもののほか、指定介護予防短期入所療養介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用者に負担させることが適当と認められるもの

4 前項第一号から第四号までに掲げる費用については、知事が定めるところによるものとする。

5 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、第三項の費用の額の支払の対象となるサー

ビスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用を記した文書を交付して説明を行い、当該利用者の同意を得なければならぬ。この場合において、同項第一号から第四号までに掲げる費用に係る同意については、文書によるものとする。

(身体拘束等の禁止)

第四十一条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たっては、当該利用者又は他の利用者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束等を行ってはならない。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前項の身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由を記録しなければならない。

(運営規程)

第四十二条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防短期入所療養介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 従業者の職種、員数及び職務の内容
- 三 指定介護予防短期入所療養介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 四 通常の送迎の実施地域
- 五 サービスの利用に当たっての留意事項
- 六 非常災害対策
- 七 その他事業の運営についての重要事項

(定員の遵守)

第四十三条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、次の各号に掲げる指定介護予防短期入所療養介護事業所の区分に応じ、当該各号に定める利用者の数以上の利用者に対して同時に指定介護予防短期入所療養介護を行ってはならない。ただし、災害、虐待その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

- 一 介護老人保健施設である指定介護予防短期入所療養介護事業所 利用者を当該介護老人保健施設の入所者とみなした場合において入所定員及び療養室の定員を超えることとなる利用者の数

- 二 療養病床を有する病院又は診療所である指定介護予防短期入所療養介護事業所 療養病床に係る病床数及び病室の定員を超えることとなる利用者の数

三 老人性認知症疾患療養病棟を有する病院である指定介護予防短期入所療養介護事業所 老人性認知症疾患療養病棟に係る病床数及び病室の定員を超えることとなる利用者数の数

四 診療所（第二号に掲げるものを除く。）である指定介護予防短期入所療養介護事業所 指定介護予防短期入所療養介護を提供する病床数及び病室の定員を超えることとなる利用者の数

（準用）

第四百四十四条 第十条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで、第三十八条、第八十三条、第百六条及び第百七条第二項の規定は、指定介護予防短期入所療養介護の事業について準用する。この場合において、第百六条中「第百十一条」とあるのは「第百四十二条」と、「介護予防短期入所生活介護従業者」とあるのは「介護予防短期入所療養介護従業者」と読み替えるものとする。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

（指定介護予防短期入所療養介護の基本的取扱方針）

第四百四十五条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防短期入所療養介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防短期入所療養介護を提供しなければならない。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、自らその提供する指定介護予防短期入所療養介護の質の評価を行うとともに、主治の医師又は歯科医師とも連携を図りつつ、常にその質の改善を図らなければならない。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供が、利用者ができる限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の様々な方法により、利用者が主体的に当該指定介護予防短期入所療養介護事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

（指定介護予防短期入所療養介護の具体的取扱方針）

第四百四十六条 指定介護予防短期入所療養介護は、第百三十六条に規定する基本方針及び

前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第八項までに定めるところにより提供する。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況及び病状、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況を的確に把握するものとする。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業所の管理者は、相当期間以上にわたり継続して入所することが予定される利用者については、前項に規定する利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえて、指定介護予防短期入所療養介護の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防短期入所療養介護計画を作成するものとする。

4 前項の介護予防短期療養介護計画は、当該介護予防短期療養介護計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

5 指定介護予防短期入所療養介護事業所の管理者は、介護予防短期入所療養介護計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

6 指定介護予防短期入所療養介護事業所の管理者は、介護予防短期入所療養介護計画を作成した際には、当該介護予防短期入所療養介護計画を利用者に交付しなければならない。

7 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たっては、介護予防短期入所療養介護計画が作成されている場合は、当該介護予防短期療養介護計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。

8 介護予防短期入所療養介護従業者は、指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように指導又は説明を行うものとする。

#### (診療の方針)

第四百四十七条 指定介護予防短期入所療養介護事業所における医師の診療の方針は、次に掲げるところによる。

一 診療は、一般に医師として診療の必要性があると認められる疾病又は負傷に対して、的確な診断に基づき、療養上妥当かつ適切に行うものとする。

二 診療に当たっては、常に医学の立場を堅持して、利用者の心身の状況を観察し、要



支援者の心理が健康に及ぼす影響に十分配慮して、心理的な効果も期待できるような適切な指導を行うものとする。

三 常に利用者の病状、心身の状況、日常生活及び置かれている環境の的確な把握に努め、利用者又はその家族に対し、適切な指導を行うものとする。

四 検査、投薬、注射、処置等は、利用者の病状に照らして妥当かつ適切に行うものとする。

五 特殊な療法又は新しい療法等については、知事が定めるもののほか行わないこと。

六 知事が定める医薬品以外の医薬品を利用者に施用し、又は処方しないこと。

七 利用者の病状の急変等により、自ら必要な医療を提供することが困難であると認めるときは、他の医師の対診を求めるとその他診療について適切な措置を講じること。

#### (機能訓練)

第四百四十八条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の心身の諸機能の維持回復を図り、日常生活の自立を助けるため、理学療法、作業療法その他必要なりハビリテーションを計画的に行わなければならない。

#### (看護及び医学的管理の下における介護)

第四百四十九条 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の自立の支援と日常生活の充実に資するよう、利用者の病状及び心身の状況に応じ、適切な技術をもって看護及び医学的管理の下における介護を行わなければならない。

2 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、一週間に二回以上、適切な方法により、利用者を入浴させ、又は清しきししなければならない。

3 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の病状及び心身の状況に応じ、適切な方法により、排せつの自立について必要な援助を行わなければならない。

4 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者のおむつを適切に取り替えなければならない。

5 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前各項に定めるもののほか、利用者に対し、離床、着替え、整容その他日常生活上の支援を適切に行わなければならない。

6 指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者に対し、当該利用者の負担により、当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の従業者以外の者による看護及び介護を受けさせてはならない。

### 第六節 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護に関する基準

#### 第一款 趣旨及び基本方針

#### (この節の趣旨)

第百五十条 第一節及び第三節から前節までの規定にかかわらず、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業（指定介護予防短期入所療養介護の事業であつて、施設の全部において少数の療養室等及び当該療養室等に近接して設けられる共同生活室（当該療養室等の利用者が交流し、共同で日常生活を営むための場所をいう。以下この章において同じ。）により一体的に構成される場所（以下この章において「ユニット」という。））に利用者の日常生活が営まれ、これに対する支援が行われるものをいう。以下同じ。）の基本方針並びに設備、運営及び介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準については、この節に定めるところによる。

（基本方針）

第百五十一条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業は、利用者一人一人の意思及び人格を尊重し、利用前の居室における生活と利用中の生活が連続したものとなるよう配慮しながら、各ユニットにおいて利用者が相互に社会的関係を築き、自律的な日常生活を営むことを支援することにより、利用者の療養生活の質の向上及び心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

第二款 設備に関する基準

第百五十二条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業を行う者（以下「ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所」という。）の設備に関する基準は、次の各号に掲げるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所の区分に応じて、当該各号に定めるとおりとする。

- 一 介護老人保健施設であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所 法に規定する介護老人保健施設として必要とされる施設及び設備（ユニット型介護老人保健施設に関するものに限る。）を有すること。
- 二 指定介護療養型医療施設であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所 平成十八年旧介護保険法に規定する指定介護療養型医療施設として必要とされる設備（ユニット型指定介護療養型医療施設に関するものに限る。）を有すること。
- 三 療養病床を有する病院であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所 平成十八年旧介護保険法に規定する指定介護療養型医療施設として必要とされる設備（ユニット型指定介護療養型医療施設（療養病床を有する病院に限る。）に関するものに限る。）を有すること。

四 療養病床を有する診療所であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所

平成十八年旧介護保険法に規定する指定介護療養型医療施設として必要とされる設備（ユニット型指定介護療養型医療施設（療養病床を有する診療所に限る。）に関するものに限る。）を有すること。

2 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者が、ユニット型指定短期入所療養介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第六十七条第一項に規定するユニット型指定短期入所療養介護事業者をいう。）の指定を併せて受け、かつ、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業とユニット型指定短期入所療養介護の事業（指定居宅サービス等基準条例第六十五条第一項に規定するユニット型指定短期入所療養介護の事業をいう。）を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第六十七条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第三款 運営に関する基準

#### （利用料等の受領）

第五十三条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防短期入所療養介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防短期入所療養介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

2 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防短期入所療養介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防短期入所療養介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 食事の提供に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者から支給された場合は、同条第二項第一号に規定する食費の基準費用額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者により当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第一号に規定する食費の負担限度額）を限度とする。）

二 滞在に要する費用（法第六十一条の三第一項の規定により特定入所者介護予防サービス費が利用者から支給された場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の基準費用

額（同条第四項の規定により当該特定入所者介護予防サービス費が利用者に代わり当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者に支払われた場合は、同条第二項第二号に規定する滞在費の負担限度額）を限度とする。）

三 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な療養室等の提供を行ったことに伴い必要となる費用

四 知事の定める基準に基づき利用者が選定する特別な食事の提供を行ったことに伴い必要となる費用

五 送迎に要する費用（知事が定める場合を除く。）

六 理美容代

七 前各号に掲げるもののほか、指定介護予防短期入所療養介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用者に負担させることが適当と認められるもの

4 前項第一号から第四号までに掲げる費用については、知事が定めるところによるものとする。

5 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、第三項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用を記した文書を交付して説明を行い、当該利用者の同意を得なければならぬ。この場合において、同項第一号から第四号までに掲げる費用に係る同意については、文書によるものとする。

（運営規程）

第一百五十四条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに、次に掲げる事項を記載したユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

一 事業の目的及び運営の方針

二 従業者の職種、員数及び職務の内容

三 指定介護予防短期入所療養介護の内容及び利用料その他の費用の額

四 通常の送迎の実施地域

五 サービスの利用に当たつての留意事項

六 非常災害対策

七 その他事業の運営についての重要事項

（勤務体制の確保等）

第二百五十五条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、従業者の勤務の体制を定めるに当たっては、次に掲げる職員配置を行わなければならない。

- 一 昼間については、ユニットごとに常時一人以上の看護職員又は介護職員を配置すること。
- 二 夜間及び深夜については、二ユニットごとに一人以上の看護職員又は介護職員を夜間及び深夜の勤務に従事する職員として配置すること。
- 三 ユニットごとに、常勤のユニットリーダーを配置すること。

2 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所ごとに、当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所の従業者によってユニット型指定介護予防短期入所療養介護を提供しなければならない。ただし、利用者の処遇に直接影響を及ぼさない業務については、この限りでない。

(定員の遵守)

第二百五十六条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、次に掲げる利用者（当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者が、ユニット型指定短期入所療養介護事業者の指定を受けて受け、かつ、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業とユニット型指定短期入所療養介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合にあつては、当該ユニット型指定短期入所療養介護事業所におけるユニット型指定介護予防短期入所療養介護及びユニット型指定短期入所療養介護の利用者。以下この条において同じ。）の数以上の利用者に対して同時に指定介護予防短期入所療養介護を行ってはならない。ただし、災害、虐待その他のやむを得ない事情がある場合は、この限りでない。

一 ユニット型介護老人保健施設であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所にあつては、利用者を当該ユニット型介護老人保健施設の入居者とみなした場合において入居定員及び療養室の定員を超えることとなる利用者の数

二 ユニット型指定介護療養型医療施設であるユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所にあつては、利用者を当該ユニット型指定介護療養型医療施設の入院患者とみなした場合において入院患者の定員及び病室の定員を超えることとなる利用者の数

(準用)

第一百五十七条 第三十九条、第四十一条、第四十四条の規定は、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業について準用する。この場合において、第四十四条中「第四十二条」とあるのは「第五十四条」と読み替えるものとする。

第四款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の提供に当たっての留意事項)

第百五十八条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者が、その有する能力に応じて、自らの生活様式及び生活習慣に沿って自律的な日常生活を営むことができるようにするため、利用者の日常生活上の活動について必要な援助を行うことにより、利用者の日常生活を支援するものとしてユニット型指定介護予防短期入所療養介護を提供しなければならない。

2 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、各ユニットにおいて利用者がそれぞれの役割を持って生活を営むことができるよう配慮してユニット型指定介護予防短期入所療養介護を提供しなければならない。

3 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者のプライバシーの確保に配慮してユニット型指定介護予防短期入所療養介護を提供しなければならない。

(看護及び医学的管理の下における介護)

第百五十九条 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の自立の支援と日常生活の充実に資するよう、利用者の病状及び心身の状況に応じ、適切な技術をもって看護及び医学的管理の下における介護を行わなければならない。

2 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者が、その病状及び心身の状況等に応じて、日常生活における家事を、それぞれの役割を持って行うよう適切に支援しなければならない。

3 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者が身体の清潔を維持し、精神的にも快適な生活を営むことができるよう、適切な方法により、利用者に入浴の機会を提供しなければならない。ただし、やむを得ない場合には、清しきを行うことをもって入浴の機会の提供に代えることができる。

4 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者の病状及び心身の状況に応じて、適切な方法により、排せつの自立について必要な支援を行わなければならない。

5 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、おむつを使用せざるを得ない利用者については、排せつの自立を図りつつ、そのおむつを適切に取り替えなければならない。

6 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、前各項に定めるもののほか、利用者が行う離床、着替え、整容その他の日常生活上の行為を適切に支援しなければならない。

7 ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業者は、利用者に対して、当該利用者の負担により、当該ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所の従業者以外の者に

よる看護及び介護を受けさせてはならない。

(準用)

第六十条 第四百四十五条から第四百四十八条までの規定は、ユニット型指定介護予防短期入所療養介護の事業について準用する。この場合において、第四十六条中「第三十六条」とあるのは「第五十一条」と、「前条」とあるのは「第六十条において準用する前条」と読み替えるものとする。

## 第十二章 介護予防特定施設入居者生活介護

### 第一節 基本方針

第六十一条 指定介護予防サービスに該当する介護予防特定施設入居者生活介護（以下「指定介護予防特定施設入居者生活介護」という。）の事業は、介護予防特定施設サービス計画（法第八条の第二十一項に規定する計画をいう。以下同じ。）に基づき、入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の支援、機能訓練及び療養上の世話をを行うことにより、当該指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供を受ける入居者（以下この章において「利用者」という。）が指定介護予防特定施設（特定施設であつて、指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業が行われるものをいう。以下同じ。）において、自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もつて利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業を行う者（以下「指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者」という。）は、安定的かつ継続的な事業運営に努めなければならない。

3 養護老人ホームが指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業を行う場合については、第六節に規定する外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業を行うこととする。

### 第二節 人員に関する基準

(従業者)

第六十二条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が指定介護予防特定施設ごとに置くべき指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たる従業者（以下「介護予防特定施設従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 生活相談員 常勤換算方法で、利用者の数が百又はその端数を増すごとに一以上
- 二 看護師若しくは准看護師（以下この章において「看護職員」という。）又は介護職員 次のイ及びロに掲げる基準を満たす数以上

イ 看護職員及び介護職員の員数の合計は、常勤換算方法で、利用者の要支援状態区分及び数に応じて規則で定める員数以上であること。

ロ 看護職員の員数は、次に掲げるとおりとすること。

(1) 利用者の数が三十を超えない指定介護予防特定施設にあつては、常勤換算方法で、一以上

(2) 利用者の数が三十を超える指定介護予防特定施設にあつては、常勤換算方法で、一に利用者の数が三十を超えて五十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

三 機能訓練指導員 一以上

四 計画作成担当者 一以上（利用者の数が百又はその端数を増すごとに一を加えて得た数を標準とすること。）

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前項第二号の介護職員を常時一人以上指定介護予防特定施設入居者生活介護に従事させなければならない。ただし、宿直時間帯にあつては、この限りでない。

3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が、指定特定施設入居者生活介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第七十五条第二項に規定する指定特定施設入居者生活介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業及び指定特定施設入居者生活介護（指定居宅サービス等基準条例第七十五条第一項に規定する指定特定施設入居者生活介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の施設において一体的に運営する場合には、第一項の規定にかかわらず、当該介護予防特定施設に置くべき介護予防特定施設従業者は、次の各号に掲げるものと、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 生活相談員 常勤換算方法で、利用者及び指定特定施設入居者生活介護の提供を受ける入居者（以下この条において「居宅サービスの利用者」という。）の合計数（以下この条において「総利用者数」という。）が百又はその端数を増すごとに一以上

二 看護職員又は介護職員 次のイ及びロに掲げる基準を満たす数以上

イ 看護職員及び介護職員の員数の合計は、常勤換算方法で、利用者の要支援状態区分及び数並びに居宅サービスの利用者の数に応じて規則で定める数以上であること。

ロ 看護職員の員数は、次に掲げるとおりとすること。

(1) 総利用者数が三十を超えない指定介護予防特定施設にあつては、常勤換算方法で、一以上

(2) 総利用者数が三十を超える指定介護予防特定施設にあつては、常勤換算方法で、



一に総利用者数が三十を超えて五十又はその端数を増すごとに一を加えて得た数以上

三 機能訓練指導員 一以上

四 計画作成担当者 一以上（総利用者数が百又はその端数を増すごとに一を加えて得た数を標準とすること。）

4 前項の場合に該当する指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、第二項の規定にかかわらず、前項第二号の介護職員を常時一人以上指定介護予防特定施設入居者生活介護及び指定特定施設入居者生活介護に従事させなければならない。ただし、指定介護予防特定施設入居者生活介護のみを提供する場合の宿直時間帯については、この限りでない。

5 第一項及び第三項の利用者及び居宅サービスの利用者数並びに総利用者数は、当該年度の前年度の平均値とする。ただし、新規に指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者の指定を受ける場合その他これによることができない場合は、推定数による。

6 第一項第一号（第三項の場合にあつては、同項第一号）の生活相談員のうち一人以上は、常勤の者でなければならない。

7 第一項第二号の看護職員及び介護職員は、主として指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たるものとし、看護職員及び介護職員のうちいずれか一人は、常勤の者でなければならない。

8 第一項第三号（第三項の場合にあつては、同項第三号）の機能訓練指導員は、日常生活を営むのに必要な機能の減退を防止するための訓練を行う能力を有する者とする。

9 第一項第三号（第三項の場合にあつては、同項第三号）の機能訓練指導員は、当該特定施設における他の従業者の職務に従事することができるものとする。

10 第一項第四号（第三項の場合にあつては、同項第四号）の計画作成担当者は、専らその職務に従事する介護支援専門員であつて、介護予防特定施設サービス計画（第三項の場合にあつては、介護予防特定施設サービス計画及び特定施設サービス計画）の作成を担当させるのに適当と認められるものとする。ただし、利用者（第三項の場合にあつては、利用者及び居宅サービスの利用者）の処遇に支障がない場合は、当該特定施設における他の従業者の職務に従事することができる。

11 第三項第二号の看護職員及び介護職員は、主として指定介護予防特定施設入居者生活介護及び指定特定施設入居者生活介護の提供に当たるものとし、看護職員及び介護職員のうちそれぞれ一人以上は、常勤の者でなければならない。ただし、指定介護予防特定施設入居者生活介護のみを提供する場合は、看護職員及び介護職員のうちいずれか一人

が常勤の者であれば足りる。

(管理者)

第六十三條 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防特定施設の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防特定施設の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三節 設備に関する基準

第六十四條 指定介護予防特定施設の建物（利用者の日常生活のために使用しない附属の建物を除く。以下同じ。）は、耐火建築物又は準耐火建築物でなければならない。

2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかの要件を満たす木造かつ平屋建ての指定介護予防特定施設の建物については、知事が、火災予防、消火活動等に関し専門的知識を有する者の意見を聴いて、火災の際の利用者の安全性が確保されていると認めるときは、耐火建築物又は準耐火建築物とすることを要しない。

一 スプリンクラー設備の設置、天井等の内装材等への難燃性の材料の使用、調理室等火災が発生するおそれがある箇所における防火区画の設置等により、初期消火及び延焼の抑制に配慮した構造であること。

二 非常警報設備の設置等による火災の早期発見及び通報の体制が整備されており、円滑な消火活動が可能なるものであること。

三 避難口の増設、搬送を容易に行うために十分な幅員を有する避難路の確保等により、円滑な避難が可能な構造であり、かつ、避難訓練を頻繁に実施すること、第六十二條の規定により置くべき介護予防特定施設従業者の員数を超える員数の介護予防特定施設従業者を置くこと等により、火災の際の円滑な避難が可能なるものであること。

3 指定介護予防特定施設には、一時介護室（指定介護予防特定施設入居者生活介護のうち居室において提供するサービスを利用者の居室において適切に提供できない場合に、一時的に利用者に移して指定介護予防特定施設入居者生活介護を行うための部屋をいう。以下同じ。）、浴室、便所、食堂及び機能訓練室を設けなければならない。ただし、他に指定介護予防特定施設入居者生活介護のうち居室において提供するサービスを適切に提供できる部屋が確保されている場合にあつては一時介護室を、他に機能訓練を行うために適当な広さを有する場所が確保できる場合にあつては機能訓練室を設けないことができる。

- 4 指定介護予防特定施設の介護居室（指定介護予防特定施設入居者生活介護を行うための専用の居室をいう。以下同じ。）は、一時介護室、浴室、便所、食堂及び機能訓練室は、次に掲げる基準を満たさなければならない。
  - 一 介護居室は、次に掲げる基準を満たすこと。
  - イ 一の居室の定員は、一人とする。ただし、利用者の処遇上必要と認められる場合は、二人とすることができる。
  - ロ プライバシーの保護に配慮し、介護を行うことができる適当な広さを有すること。
  - ハ 地階に設けないこと。
  - ニ 一以上の出入口は、避難上有効な空地、廊下又は広間に直接面して設けること。
  - ニ 一時介護室は、介護を行うために適当な広さを有すること。
  - 三 浴室は、身体の不自由な者の入浴に適したものとすること。
  - 四 便所は、居室のある階ごとに設置し、非常用設備を備えること。
  - 五 食堂は、機能を十分に発揮し得る適当な広さを有すること。
  - 六 機能訓練室は、機能を十分に発揮し得る適当な広さを有すること。
- 5 指定介護予防特定施設は、利用者が車椅子で円滑に移動することが可能な空間と構造を有するものでなければならない。
- 6 指定介護予防特定施設には、消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備を設けるものとする。
- 7 前各項に定めるもののほか、指定介護予防特定施設の構造又は設備の基準については、建築基準法及び消防法（昭和二十三年法律第八十六号）の定めるところによる。
- 8 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が、指定特定施設入居者生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定特定施設入居者生活介護の事業及び指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業を同一の施設において一体的に運営する場合については、指定居宅サービス等基準条例第七十八条第一項から第七項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

（内容及び手続の説明及び契約の締結等）

第六十五条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、入居者若しくは入居申込者（以下「入居者等」という。）又はこれらの家族から指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供の申込みがあった場合には、あらかじめこれらの者に対し、第七十条に規定する重要事項に関する規程の概要、従業者の勤務の体制、利用料の額及びその改定の方法その他の入居者等のサービスの選択に資すると認められる重要事項を、文書の交

付その他規則で定める方法により明示して説明し、入居及び指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に関する契約を文書により締結しなければならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前項の契約において、入居者の権利を不当に制限するような契約解除の条件を定めてはならない。

3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、より適切な指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供するため、利用者を介護居室又は一時介護室に移して介護を行うこととしている場合については、利用者が介護居室又は一時介護室に移る際の当該利用者の意思の確認等の適切な手続の内容をあらかじめ第一項の契約に係る文書に明記しなければならない。

(指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供の開始等)

第百六十六条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、正当な理由なく入居者に対する指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供を拒んではならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、入居者が指定介護予防特定施設入居者生活介護に代えて当該指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者以外の者が提供する介護予防サービスを利用することを妨げてはならない。

3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、入居者等が入院治療を要する者であること等入居者等に対し自ら必要な指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供することが困難であると認めた場合は、適切な病院又は診療所の紹介その他の適切な措置を速やかに講じなければならない。

4 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たっては、利用者の心身の状況及び置かれている環境等の把握に努めなければならない。

(サービスの提供の記録)

第百六十七条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供した際には、提供した具体的なサービスの内容等を記録しなければならない。

(利用料等の受領)

第百六十八条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防特定施設入居者生活介護に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者に支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。

- 2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防特定施設入居者生活介護に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。
  - 3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。
    - 一 利用者の選定により提供される介護その他の日常生活上の便宜に要する費用
    - 二 おむつ代
    - 三 前二号に掲げるもののほか、指定介護予防特定施設入居者生活介護において提供される便宜のうち、日常生活においても通常必要となるものに係る費用であつて、当該便宜を受けた利用者負担させることが適当と認められるもの
    - 4 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。
- (身体拘束等の禁止)

第六十九条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たっては、当該利用者又は他の利用者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束等を行ってはならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前項の身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由を記録しなければならない。

(運営規程)

第七十条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 介護予防特定施設従業者の職種、員数及び職務内容
- 三 入居定員及び居室数
- 四 指定介護予防特定施設入居者生活介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 五 利用者が介護居室又は一時介護室に移る場合の条件及び手続
- 六 施設の利用に当たつての留意事項
- 七 緊急時等における対応方法

## 八 非常災害対策

### 九 その他事業の運営についての重要事項

#### (協力医療機関等)

第七十一条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、利用者の病状の急変等に備えるため、あらかじめ、協力医療機関を定めておかなければならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、あらかじめ、協力歯科医療機関（協力を得ることができるとする歯科医療機関をいう。）を定めておくよう努めなければならない。（準用）

第七十二条 第十二条、第二十一条から第二十四条まで、第三十七条、第三十八条及び第八十三条の規定は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業について準用する。

この場合において、第三十七条中「介護予防訪問入浴介護従業者」とあるのは「介護予防特定施設従業者」と読み替えるものとする。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

#### (指定介護予防特定施設入居者生活介護の基本的取扱方針)

第七十三条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防特定施設入居者生活介護の目標を設定し、計画的に指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供しなければならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、自らその提供する指定介護予防特定施設入居者生活介護の質の評価を行うとともに、主治の医師又は歯科医師とも連携を図りつつ、常にその質の改善を図らなければならない。

3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

5 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たり、利用者との意思の疎通を十分に図ることその他の方法により、利用者が主体的に当該指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者の提供するサービスに参加するよう適切な働きかけに努めなければならない。

(指定介護予防特定施設入居者生活介護の具体的取扱方針)

第七十四条 指定介護予防特定施設入居者生活介護は、第六十一条に規定する基本方針及び前条に規定する基本的取扱方針に基づき、次項から第十項までに定めるところにより提供する。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達等の適切な方法により、利用者の心身の状況、有する能力及び置かれている環境等の評価を通じて当該利用者が現に抱える問題点を把握した上で、当該利用者が自立した生活を営むことができるように支援する上で解決すべき課題を把握しなければならない。

3 計画作成担当者は、利用者の希望及び利用者について把握された解決すべき課題を踏まえて、他の介護予防特定施設従業者と協議の上、指定介護予防特定施設入居者生活介護の目標及び当該目標の達成時期、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、サービスを提供する上での留意点、サービスの提供期間等を記載した介護予防特定施設サービス計画の原案を作成するものとする。

4 計画作成担当者は、介護予防特定施設サービス計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、文書により当該利用者の同意を得なければならない。

5 計画作成担当者は、介護予防特定施設サービス計画を作成した際には、当該介護予防特定施設サービス計画を利用者に交付しなければならない。

6 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たっては、介護予防特定施設サービス計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うものとする。

7 介護予防特定施設従業者は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うものとする。

8 計画作成担当者は、他の介護予防特定施設従業者との連絡を継続的に行うことにより、介護予防特定施設サービス計画に記載したサービスの提供期間が終了するまでの間に、少なくとも一回、当該介護予防特定施設サービス計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うとともに、利用者についての解決すべき課題の把握を行うものとする。

9 計画作成担当者は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防特定施設サービス計画の変更を行うものとする。

10 第二項から第八項までの規定は、前項に規定する介護予防特定施設サービス計画の変

更について準用する。

(介護)

第七十五条 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じ、利用者の自立の支援と日常生活の充実に資するよう適切な技術をもって介護を行わなければならない。

2 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、自ら入浴することが困難な利用者に対し、一週間に二回以上、適切な方法により、入浴させ、又は清しきしななければならない。

3 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、利用者の心身の状況に応じ、適切な方法により、排せつの自立について必要な援助を行わなければならない。

4 指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前三項に定めるもののほか、利用者に対し、食事、離床、着替え、整容その他日常生活上の世話を適切に行わなければならない。

(準用)

第七十六条 第七十七条の規定は、指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業について準用する。

第六節 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護に関する基準

第一款 趣旨及び基本方針

(この節の趣旨)

第七十七条 前各節の規定にかかわらず、外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護（指定介護予防特定施設入居者生活介護であつて、当該指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が行う介護予防特定施設サービス計画の作成、利用者の安否の確認、利用者の生活相談等（以下この節において「基本サービス」という。）及び当該介護予防特定施設入居者生活介護事業者の委託を受けた事業者（以下「受託介護予防サービス事業者」という。）により、当該介護予防特定施設サービス計画に基づき行われる入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の支援、機能訓練及び療養上の世話（以下「受託介護予防サービス」という。）をいう。）の事業の基本方針並びに人員、設備、運営及び介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準については、この節に定めるところによる。

(基本方針)

第七十八条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業は、介護予防特定施設サービス計画に基づき、受託介護予防サービス事業者による受託介護予防



サービスを適切かつ円滑に提供することにより、利用者が当該指定介護予防特定施設において自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

2 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業を行う者（以下「外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者」という。）は、安定的かつ継続的な事業運営に努めなければならない。

#### 第二款 人員に関する基準

（従業者）

第七十九条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が指定介護予防特定施設ごとに置くべき基本サービスを提供する従業者（以下「外部サービス利用型介護予防特定施設従業者」という。）は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 生活相談員 常勤換算方法で、利用者の数が百又はその端数を増すごとに一以上

二 介護職員 常勤換算方法で、利用者の数が三十又はその端数を増すごとに一以上

三 計画作成担当者 一以上（利用者の数が百又はその端数を増すごとに一を加えて得た数を標準とすること。）

2 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が、外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護事業者（指定居宅サービス等基準条例第九十条第二項に規定する外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護事業者をいう。以下同じ。）の指定を併せて受け、かつ、外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業及び外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護（指定居宅サービス等基準条例第八十九条に規定する外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護をいう。以下同じ。）の事業を同一の施設において一体的に運営する場合には、前項の規定にかかわらず、当該施設に置くべき外部サービス利用型介護予防特定施設従業者は、次の各号に掲げるものとし、その員数は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 生活相談員 常勤換算方法で、利用者及び外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護の提供を受ける入居者（以下この条において「居宅サービスの利用者」という。）の合計数（以下この条において「総利用者数」という。）が百又はその端数を増すごとに一以上

二 介護職員 常勤換算方法で、居宅サービスの利用者の数が十又はその端数を増すごとに一及び利用者の数が三十又はその端数を増すごとに一以上

三 計画作成担当者 一以上（総利用者数が百又はその端数を増すごとに一を加えて得

た数を標準とすること。)

3 前二項の利用者及び居室サービスの利用者の数並びに総利用者数は、当該年度の前年度の平均値とする。ただし、新規に外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者の指定を受ける場合その他これによることができない場合は、推定数による。

4 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、常時一人以上の指定介護予防特定施設の従業者（第一項に規定する外部サービス利用型介護予防特定施設従業者を含む。以下この節において同じ。）を当該指定介護予防特定施設に配置しなければならない。ただし、宿直時間帯については、この限りでない。

5 第一項第一号（第二項の場合にあつては、同項第一号）の生活相談員のうち一人以上は、専らその職務に従事する常勤の者でなければならない。ただし、利用者（第二項の場合にあつては、利用者及び居室サービスの利用者）の処遇に支障がない場合は、当該介護予防特定施設における他の従業者の職務に従事することができる。

6 第一項第三号（第二項の場合にあつては、同項第三号。次項において同じ。）の計画作成担当者は、専らその職務に従事する介護支援専門員であつて、介護予防特定施設サービス計画（第二項の場合にあつては、介護予防特定施設サービス計画及び特定施設サービス計画）の作成を担当させるのに適当と認められるものでなければならない。ただし、利用者（第二項の場合にあつては、利用者及び居室サービスの利用者）の処遇に支障がない場合は、当該特定施設における他の従業者の職務に従事することができる。

7 第一項第三号の計画作成担当者のうち一人以上は、常勤の者でなければならない。（管理者）

第八十条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防特定施設の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防特定施設の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三款 設備に関する基準

第八十一条 指定介護予防特定施設の建物（利用者の日常生活のために使用しない附属の建物を除く。以下同じ。）は、耐火建築物又は準耐火建築物でなければならない。

2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかの要件を満たす木造かつ平屋建ての指定介護予防特定施設の建物については、知事が、火災予防、消火活動等に関し専門的知

識を有する者の意見を聴いて、火災の際の利用者の安全性が確保されていると認めたと  
きは、耐火建築物又は準耐火建築物とすることを要しない。

一 スプリンクラー設備の設置、天井等の内装材等への難燃性の材料の使用、調理室等  
火災が発生するおそれがある箇所における防火区画の設置等により、初期消火及び延  
焼の抑制に配慮した構造であること。

二 非常警報設備の設置等による火災の早期発見及び通報の体制が整備されており、円  
滑な消火活動が可能なものであること。

三 避難口の増設、搬送を容易に行うために十分な幅員を有する避難路の確保等により、  
円滑な避難が可能な構造であり、かつ、避難訓練を頻繁に実施すること、第七十九  
条の規定により置くべき外部サービス利用型介護予防特定施設従業者の員数を超える  
員数の外部サービス利用型介護予防特定施設従業者を置くこと等により、火災の際の  
円滑な避難が可能なものであること。

3 指定介護予防特定施設には、居室、浴室、便所及び食堂を設けなければならない。た  
だし、居室の面積が二十五平方メートル以上である場合には、食堂を有しないことがで  
きる。

4 指定介護予防特定施設の居室、浴室、便所及び食堂は、次に掲げる基準を満たさなけ  
ればならない。

一 居室は、次に掲げる基準を満たすこと。

イ 一の居室の定員は、一人とすること。ただし、利用者の処遇上必要と認められる  
場合は、二人とすることができる。

ロ プライバシーの保護に配慮し、介護を行うことができる適当な広さを有すること。

ハ 地階に設けないこと。

ニ 一以上の出入口は、避難上有効な空地、廊下又は広間に直接面して設けること。

ホ 非常通報装置又はこれに代わる設備を設けること。

二 浴室は、身体の不自由な者の入浴に適したものとすること。

三 便所は、居室のある階ごとに設置し、非常用設備を備えること。

四 食堂は、機能を十分に発揮し得る適当な広さを有すること。

5 指定介護予防特定施設は、利用者が車椅子で円滑に移動することが可能な空間と構造  
を有するものでなければならない。

6 指定介護予防特定施設には、消火設備その他の非常災害に対処するための必要な設備  
を設けるものとする。

7 前各項に定めるもののほか、指定介護予防特定施設の構造及び設備の基準については、

建築基準法及び消防法の定めるところによる。

8 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者が、外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業及び外部サービス利用型指定特定施設入居者生活介護の事業を同一の施設において一体的に運用する場合には、指定居室サービス等基準条例第九十三条第一項から第七項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前各項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四款 運営に関する基準

(内容及び手続の説明並びに契約の締結等)

第八十二条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、入居者等又はその家族から外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の申込みがあつた場合には、あらかじめ、これらの者に対し、次条に規定する重要事項に関する規程の概要、従業者の勤務の体制、当該外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者と受託介護予防サービス事業者の業務の分担の内容、受託介護予防サービス事業者の名称、受託介護予防サービス事業者が受託介護予防サービスの事業を行う事業所(以下「受託介護予防サービス事業所」という。)の名称、受託介護予防サービスの種類、利用料の額及び改定の方法その他の入居者等のサービスの選択に資すると認められる重要事項を、文書の交付その他規則で定める方法により明示して説明し、入居及び外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の提供に関する契約(養護老人ホームに入居する場合にあつては、入居に関する契約を除く。)を文書により締結しなければならない。

2 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、前項の契約において、入居者の権利を不当に制限するような契約解除の条件を定めてはならない。

3 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、より適切な外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護を提供するため利用者を他の居室に移して介護を行うこととしている場合には、利用者が他の居室に移る際の当該利用者の意思の確認等の適切な手続の内容をあらかじめ第一項の契約に係る文書に明記しなければならない。

(運営規程)

第八十三条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、指定介護予防特定施設ごとに、次に掲げる事項を記載した外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかな

なければならない。

- 一 事業の目的及び運営の方針
- 二 外部サービス利用型介護予防特定施設従業者の職種、員数及び職務内容
- 三 入居定員及び居室数
- 四 外部サービス利用型介護予防特定施設入居者生活介護の内容及び利用料その他の費用の額
- 五 受託介護予防サービス事業者及び受託介護予防サービス事業所の名称及び所在地
- 六 利用者が他の居室に移る場合の条件及び手続
- 七 施設の利用に当たつての留意事項
- 八 緊急時等における対応方法
- 九 非常災害対策
- 十 その他事業の運営についての重要事項

(受託介護予防サービス事業者への委託)

第百八十四条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、受託介護予防サービスの提供に関する業務を委託するときは、その契約を、受託介護予防サービス事業者ごとに文書により締結しなければならない。

2 受託介護予防サービス事業者は、指定介護予防サービス事業者又は指定地域密着型介護予防サービス事業者でなければならない。

3 受託介護予防サービス事業者が提供する受託介護予防サービスの種類は、指定介護予防訪問介護、指定介護予防訪問入浴介護、指定介護予防訪問看護、指定介護予防訪問リハビリテーション、指定介護予防通所介護、指定介護予防通所リハビリテーション、第百八十八条に規定する指定介護予防福祉用具貸与及び指定介護予防認知症対応型通所介護とする。

4 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、事業の開始に当たっては、指定介護予防訪問介護、指定介護予防訪問看護及び指定介護予防通所介護を提供する事業者と、第一項の規定による契約の締結方法によりこれらのサービスの提供に関する業務を委託する契約を締結するものとする。

5 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、第三項に規定する受託介護予防サービスの種類のうち前項に規定するもの以外のものについては、利用者の状況に応じて、第一項の規定による契約の締結方法により、受託居宅サービス事業者とこれらの提供に関する業務を委託する契約を締結するものとする。

6 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、第三項に規定す

る受託介護予防サービスの種類のうち指定介護予防認知症対応型通所介護の提供に関する業務を受託介護予防サービス事業者に委託する場合には、その契約を、指定介護予防特定施設と同一の市町の区域内に所在する指定介護予防認知症対応型通所介護の事業を行う受託介護予防サービス事業所において当該受託介護予防サービスが提供されるものとしなければならない。

7 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、受託介護予防サービス事業者に対し、受託介護予防サービスに係る業務について必要な管理及び指揮命令を行うものとする。

8 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、受託介護予防サービスに係る業務の実施状況について定期的に確認し、その結果等を記録しなければならない。

(準用)

第八十五条 第十二条、第二十一条から第二十四条まで、第三十七条、第三十八条、第八十三条、第六十六条から第六十九条まで及び第七十一条の規定は、外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業について準用する。この場合において、第三十七条中「介護予防訪問入浴介護従業者」とあるのは「指定介護予防特定施設の従業者」と、第六十六条中「指定介護予防特定施設入居者生活介護」とあるのは「基本サービスを」と読み替えるものとする。

第五款 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(受託介護予防サービスの提供)

第八十六条 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、介護予防特定施設サービス計画に基づき、受託介護予防サービス事業者により、適切かつ円滑に受託介護予防サービスが提供されるよう、必要な措置を講じなければならない。

2 外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者は、受託介護予防サービス事業者が受託介護予防サービスを提供した場合には、当該受託介護予防サービスを提供した日時、時間、具体的なサービスの内容等を文書により当該外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護事業者に報告させなければならない。

(準用)

第八十七条 第七十三条及び第七十四条の規定は、外部サービス利用型指定介護予防特定施設入居者生活介護の事業について準用する。この場合において、第七十四条中「他の介護予防特定施設従業者」とあるのは「他の外部サービス利用型介護予防特定施設従業者及び受託介護予防サービス事業者」と読み替えるものとする。

## 第十三章 介護予防福祉用具貸与

### 第一節 基本方針

第八十八条 指定介護予防サービスに該当する介護予防福祉用具貸与（以下「指定介護予防福祉用具貸与」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居室において、自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の心身の状況、希望及び置かれている環境を踏まえた適切な福祉用具（法第八条の第十二項の規定により厚生労働大臣が定める福祉用具をいう。以下この章において同じ。）の選定の援助、取付け、調整等を行い、福祉用具を貸与することにより、利用者の生活機能の維持又は改善を図るものでなければならぬ。

### 第二節 人員に関する基準

#### （従業者）

第八十九条 指定介護予防福祉用具貸与の事業を行う者（以下「指定介護予防福祉用具貸与事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定介護予防福祉用具貸与事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、福祉用具専門相談員（令第四条第一項に規定する福祉用具専門相談員をいう。以下同じ。）とし、その員数は、常勤換算方法で、二以上とする。

2 指定介護予防福祉用具貸与事業者が、次の各号に掲げる事業者の指定を併せて受け、かつ、当該指定に係る事業と指定介護予防福祉用具貸与の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、当該各号に掲げる事業者の区分に応じ、それぞれ当該各号に定める規定に基づく人員に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

一 第二百二条第一項に規定する指定特定介護予防福祉用具販売事業者 第二百二条第一項

二 指定福祉用具貸与事業者（指定居室サービス等基準条例第二百条第一項に規定する指定福祉用具貸与事業者をいう。以下同じ。） 指定居室サービス等基準条例第二百

#### 条第一項

三 指定特定福祉用具販売事業者（指定居室サービス等基準条例第二百十三条第一項に規定する指定特定福祉用具販売事業者をいう。以下同じ。） 指定居室サービス等基

#### 準条例第二百十三条第一項

#### （管理者）

第九十条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、介護予防福祉用具貸与事業所ごとに管理者を置かなければならぬ。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定介護予防福祉用具貸与事業者の管理上支障がない場合は、当該指定介護予防福祉用具貸与事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

#### 第三節 設備に関する基準

第九十一条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、福祉用具の保管のために必要な設備及び福祉用具の消毒のために必要な器材並びに指定介護予防福祉用具貸与の事業の運営を行うために必要な広さを有する区画を設けるほか、指定介護予防福祉用具貸与の提供に必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。ただし、規則で定める方法により福祉用具の保管又は消毒を他の事業者に行わせる場合には、福祉用具の保管のために必要な設備又は福祉用具の消毒のために必要な器材を有しないことができる。

2 前項本文の福祉用具の保管のために必要な設備の基準は、次に掲げるとおりとする。

一 清潔であること。

二 既に消毒又は補修がなされている福祉用具とそれ以外の福祉用具を区分して保管することが可能であること。

3 第一項本文の福祉用具の消毒のために必要な器材の基準は、当該指定介護予防福祉用具貸与事業者が取り扱う福祉用具の種類及び材質等からみて適切な消毒効果を有することとする。

4 指定介護予防福祉用具貸与事業者が、指定福祉用具貸与事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防福祉用具貸与の事業と指定居宅サービス等基準条例第九十九条の指定福祉用具貸与（以下「指定福祉用具貸与」という。）の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第二百二条第一項から第三項までに規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前三項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

#### 第四節 運営に関する基準

##### （利用料等の受領）

第九十二条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、法定代理受領サービスに該当する指定介護予防福祉用具貸与を提供した際には、当該提供を受けた利用者から利用料の一部として、当該指定介護予防福祉用具貸与に係る介護予防サービス費用基準額から当該指定介護予防福祉用具貸与事業者を支払われる介護予防サービス費の額を控除して得られた額の支払を受けるものとする。



2 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、法定代理受領サービスに該当しない指定介護予防福祉用具貸与を提供した際に当該提供を受けた利用者から支払を受ける利用料の額と、当該指定介護予防福祉用具貸与に係る介護予防サービス費用基準額との間に、不合理な差額が生じないようにしなければならない。

3 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、前二項の規定により利用者から支払を受ける利用料のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 通常の事業の実施地域以外の地域において指定介護予防福祉用具貸与を行う場合の交通費

二 福祉用具の搬出入に特別な措置が必要な場合の当該措置に要する費用

4 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、前項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

5 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、あらかじめ定めた期日までに利用者から利用料の全部又は一部の支払がなく、当該期日後の支払の請求に当該利用者が正当な理由なく応じない場合は、当該指定介護予防福祉用具貸与に係る福祉用具を適切な方法により回収すること等により、当該指定介護予防福祉用具貸与の提供を中止することができる。

#### (運営規程)

第九十三条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、指定介護予防福祉用具貸与事業所ごとに、次に掲げる事項を記載した指定介護予防福祉用具貸与の事業の運営についての重要事項に関する規程を定めておかなければならない。

一 事業の目的及び運営の方針

二 従業者の職種、員数及び職務内容

三 営業日及び営業時間

四 指定介護予防福祉用具貸与の提供方法、取り扱う福祉用具の種目及び利用料その他の費用の額

五 通常の事業の実施地域

六 その他事業の運営についての重要事項

#### (福祉用具の取扱種目)

第九十四条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、利用者の身体の状態の多様性、変化等に対応することができるよう、できる限り多くの種類の福祉用具を取り扱うようにしなければならない。

#### (準用)

第九十五条 第九条から第十四条まで、第二十一条から第二十四条まで及び第三十八条の規定は、指定介護予防福祉用具貸与の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第九十三条」と、「訪問介護員等」とあるのは「福祉用具専門相談員」と、第十一条中「以下同じ。」とあるのは「以下同じ。」、取り扱う福祉用具の種目」と読み替えるものとする。

#### 第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定介護予防福祉用具貸与の基本的取扱方針)

第九十六条 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定介護予防福祉用具貸与の目標を設定し、計画的に指定介護予防福祉用具貸与を提供しなければならない。

2 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、自らその提供する指定介護予防福祉用具貸与の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

3 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、指定介護予防福祉用具貸与の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定介護予防福祉用具貸与事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

(指定介護予防福祉用具貸与の具体的取扱方針)

第九十七条 福祉用具専門相談員が行う指定介護予防福祉用具貸与は、次に掲げるところにより提供するものとする。

一 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、主治の医師又は歯科医師からの情報伝達及びサービス担当者会議への出席等の適切な方法により、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を的確に把握し、福祉用具が適切に選定され、かつ、使用されるよう、専門的知識に基づき相談に応じるとともに、福祉用具の機能、使用方法、利用料等に関する情報が記載された目録等の文書を示してこれらの情報を提供し、個別の福祉用具の貸与に係る当該利用者の同意を得ること。

二 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、次条第一項に規定する介護予防福祉用具貸与計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うこと。

三 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、懇切丁寧に行うことを旨とし、利用者又はその家族に対し、サービスの提供方法等について、理解しやすいように説明を行うこと。

四 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、貸与する福祉用具の機能、安全性、衛生状態等に関する点検を行うこと。

五 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、利用者の身体の状況等に応じて福祉用具の調整を行うとともに、当該福祉用具の使用法、使用上の留意事項、故障時の対応等を記載した文書を当該利用者に交付し、十分な説明を行った上で、必要に応じて当該利用者実際に当該福祉用具を使用させながら使用方法の指導を行うこと。

六 指定介護予防福祉用具貸与の提供に当たっては、利用者等からの要請等に応じて、貸与した福祉用具の使用状況を確認し、必要に応じて、使用方法の指導、修理等を行うこと。

#### (介護予防福祉用具貸与計画の作成)

第九十八条 福祉用具専門相談員は、利用者の心身の状況、利用者の置かれている環境その他の利用者の日常生活全般の状況及び当該利用者の希望を踏まえ、指定介護予防福祉用具貸与の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した介護予防福祉用具貸与計画を作成しなければならない。この場合において、当該利用者により第二十一条に規定する指定特定介護予防福祉用具販売の利用があるときは、第二十条第一項に規定する特定介護予防福祉用具販売計画と一体のものとして当該介護予防福祉用具貸与計画を作成しなければならない。

2 前項の介護予防福祉用具貸与計画は、当該介護予防福祉用具貸与計画に係る利用者について既に介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

3 福祉用具専門相談員は、介護予防福祉用具貸与計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

4 福祉用具専門相談員は、介護予防福祉用具貸与計画を作成した際には、当該介護予防福祉用具貸与計画を利用者に交付しなければならない。

5 福祉用具専門相談員は、介護予防福祉用具貸与計画に基づくサービス提供の開始の時から、必要に応じ、当該介護予防福祉用具貸与計画の実施状況の把握（以下この条において「モニタリング」という。）を行うものとする。

6 福祉用具専門相談員は、モニタリングの結果を記録し、当該記録を当該指定介護予防福祉用具貸与の提供に係る介護予防サービス計画を作成した指定介護予防支援事業者に報告しなければならない。

7 福祉用具専門相談員は、モニタリングの結果を踏まえ、必要に応じて介護予防福祉用具貸与計画の変更を行うものとする。

8 第一項から第四項までの規定は、前項に規定する介護予防福祉用具貸与計画の変更について準用する。

#### 第六節 基準該当介護予防サービスに関する基準

##### (従業者)

第九十九条 基準該当介護予防サービスに該当する介護予防福祉用具貸与又はこれに相当するサービス（以下「基準該当介護予防福祉用具貸与」という。）の事業を行う者が当該事業を行う事業所（以下「基準該当介護予防福祉用具貸与事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、福祉用具専門相談員とし、その員数は、常勤換算方法で二以上とする。

2 基準該当介護予防福祉用具貸与の事業と基準該当福祉用具貸与（指定居宅サービス等基準条例第二十条第一項に規定する基準該当福祉用具貸与をいう。以下同じ。）の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合については、当該事業者は、同項に規定する人員に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

##### (準用)

第二百条 第九条から第十四条まで、第二十一条、第二十二条、第二十三条（第五項及び第六項を除く。）、第二十四条及び第三十八条並びに第一節、第二節（第八十九条を除く。）、第三節、第四節（第九十二条第一項及び第九十五条を除く。）及び前節の規定は、基準該当介護予防福祉用具貸与の事業に準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第二百条において準用する第九十三条」と、「訪問介護員等」とあるのは「福祉用具専門相談員」と、第十一条中「以下同じ。」とあるのは「以下同じ。）、取り扱う福祉用具の種目」と、第九十二条第二項中「法定代理受領サービスの該当しない指定介護予防福祉用具貸与」とあるのは「基準該当介護予防福祉用具貸与」と、同条第三項中「前二項」とあるのは「前項」と読み替えるものとする。

#### 第十四章 特定介護予防福祉用具販売

##### 第一節 基本方針

第二百一条 指定介護予防サービスに該当する特定介護予防福祉用具販売（以下「指定特定介護予防福祉用具販売」という。）の事業は、利用者が可能な限りその居宅において、自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の心身の状況、希望及び置かれている環境を踏まえた適切な特定介護予防福祉用具の選定の援助、取付け、調整等を行い、特定介護予防福祉用具を販売することにより、利用者の心身の機能の維持回復を図り、もって利用者の生活機能の維持又は向上を目指すものでなければならない。

## 第二節 人員に関する基準

### (従業者)

第二百二条 指定特定介護予防福祉用具販売の事業を行う者（以下「指定特定介護予防福祉用具販売事業者」という。）が当該事業を行う事業所（以下「指定特定介護予防福祉用具販売事業所」という。）ごとに置くべき従業者は、福祉用具専門相談員とし、その員数は、常勤換算方法で、二以上とする。

2 指定特定介護予防福祉用具販売事業者が、次の各号に掲げる事業者の指定を併せて受け、かつ、当該指定に係る事業と指定特定介護予防福祉用具販売の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、当該各号に掲げる事業者の区分に応じて、それぞれ当該各号に定める規定に基づく人員に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

- 一 指定介護予防福祉用具貸与事業者 第八十九条第一項
- 二 指定福祉用具貸与事業者 指定居宅サービス等基準条例第二百条第一項
- 三 指定特定福祉用具販売事業者 指定居宅サービス等基準条例第二百十三条第一項（管理者）

第二百三条 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、指定特定介護予防福祉用具販売事業所ごとに管理者を置かなければならない。

2 前項の管理者は、常勤の者でなければならない。

3 第一項の管理者は、専らその職務に従事する者でなければならない。ただし、指定特定介護予防福祉用具販売事業所の管理上支障がない場合は、当該指定特定介護予防福祉用具販売事業所の従業者の職務に従事し、又は同一敷地内にある他の事業所、施設等の従業者及び管理者の職務に従事することができる。

### 第三節 設備に関する基準

第二百四条 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、指定特定介護予防福祉用具販売の事業の運営を行うために必要な広さを有する区画を設けるほか、指定特定介護予防福祉用具販売の提供に必要なその他の設備及び備品等を備えなければならない。

2 指定特定介護予防福祉用具販売事業者が、指定特定福祉用具販売事業者の指定を併せて受け、かつ、指定特定介護予防福祉用具販売の事業と指定特定福祉用具販売の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合には、指定居宅サービス等基準条例第二百十五条第一項に規定する設備に関する基準を満たすことをもって、前項に規定する基準を満たすものとみなすことができる。

### 第四節 運営に関する基準

(サービスの提供の記録)

第二百五条 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、指定特定介護予防福祉用具販売を提供した際には、提供した具体的なサービスの内容等を記録するとともに、利用者からの申出があった場合には、文書の交付その他適切な方法により、当該記録の内容を当該利用者に提供しなければならない。

(販売費用の額等の受領)

第二百六条 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、指定特定介護予防福祉用具販売を提供した際には、法第五十六条第三項に規定する現に当該指定介護予防福祉用具の購入に要した費用の額(以下「販売費用の額」という。)の支払を受けるものとする。

2 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、前項に規定する販売費用の額のほか、次に掲げる費用の額の支払を利用者から受けることができる。

一 通常の実施地域以外の地域において指定特定介護予防福祉用具販売を行う場合の交通費

二 特定介護予防福祉用具の搬入に特別な措置が必要な場合の当該措置に要する費用

3 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、前項の費用の額の支払の対象となるサービスの提供に当たっては、あらかじめ、利用者又はその家族に対し、当該サービスの内容及び費用について説明を行い、当該利用者の同意を得なければならない。

(準用)

第二百七条 第九条から第十三条まで、第二十一条から第二十四条まで、第三十八条、第九百九十三条及び第九百九十四条の規定は、指定特定介護予防福祉用具販売の事業について準用する。この場合において、第九条中「第十九条」とあるのは「第二百七条において準用する第九百九十三条」と、「訪問介護員等」とあるのは「福祉用具専門相談員」と、第十一条中「(以下同じ。)」とあるのは「(以下同じ。)」)、取り扱う特定介護予防福祉用具の種目」と、第九百九十三条及び第九百九十四条中「福祉用具」とあるのは「特定介護予防福祉用具」と、第九百九十三条中「利用料」とあるのは「販売費用の額」と読み替えるものとする。

第五節 介護予防のための効果的な支援の方法に関する基準

(指定特定介護予防福祉用具販売の基本的取扱方針)

第二百八条 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、利用者の介護予防に資するよう、指定特定介護予防福祉用具販売の目標を設定し、計画的に指定特定介護予防福祉用具販売を提供しなければならない。

2 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、自らその提供する指定特定介護予防福祉用具

具販売の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。

3 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、指定特定介護予防福祉用具販売の提供が、利用者が可能な限り要介護状態とならず自立した日常生活を営むことができるよう支援することを目的とするものであることを常に意識してサービスの提供に当たらなければならない。

4 指定特定介護予防福祉用具販売事業者は、利用者がその有する能力を最大限に活用することができるよう検討された方法によるサービスの提供に努めなければならない。

(指定特定介護予防福祉用具販売の具体的取扱方針)

第二百九条 福祉用具専門相談員の行う指定特定介護予防福祉用具販売は、次に掲げるところにより提供するものとする。

一 指定特定介護予防福祉用具販売の提供に当たっては、利用者の心身の状況、希望及び置かれている環境を踏まえ、指定介護予防福祉用具が適切に選定され、かつ、使用されるよう、専門的知識に基づき相談に応じるとともに、指定介護予防福祉用具の機能、使用方法、販売費用の額等を記載した目録等の文書を示してこれらの情報を提供し、個別の指定介護予防福祉用具の販売に係る当該利用者の同意を得ること。

二 指定特定介護予防福祉用具販売の提供に当たっては、次条第一項に規定する指定介護予防福祉用具販売計画に基づき、利用者が日常生活を営むのに必要な支援を行うこと。

三 指定特定介護予防福祉用具販売の提供に当たっては、販売する指定介護予防福祉用具の機能、安全性、衛生状態等に関する点検を行うこと。

四 指定特定介護予防福祉用具販売の提供に当たっては、利用者の身体状況等に応じて指定介護予防福祉用具の調整を行うとともに、当該指定介護予防福祉用具の使用方法、使用上の留意事項等を記載した文書を利用者に交付し、十分な説明を行った上で、必要に応じて当該利用者実際に当該指定介護予防福祉用具を使用させながら使用方法の指導を行うこと。

五 介護予防サービス計画に指定特定介護予防福祉用具販売が位置づけられる際に、当該介護予防サービス計画に指定介護予防福祉用具販売が必要な理由が記載されるよう必要な措置を講じること。

(指定介護予防福祉用具販売計画の作成)

第二百十条 福祉用具専門相談員は、利用者の心身の状況、希望及び置かれている環境を踏まえて、指定特定介護予防福祉用具販売の目標、当該目標を達成するための具体的なサービスの内容、当該サービスの提供期間等を記載した指定介護予防福祉用具販売計画

を作成しなければならない。この場合において、当該利用者に指定介護予防福祉用具貸与の利用があるときは、第九十八条第一項に規定する介護予防福祉用具貸与計画と一体のものとして当該特定介護予防福祉用具販売計画を作成しなければならない。

2 前項の特定介護予防福祉用具販売計画は、既に当該特定介護予防福祉用具販売計画に係る利用者について介護予防サービス計画が作成されている場合は、当該介護予防サービス計画の内容に沿って作成されなければならない。

3 福祉用具専門相談員は、特定介護予防福祉用具販売計画の作成に当たっては、その原案の内容について利用者又はその家族に説明し、当該利用者の同意を得なければならない。

4 福祉用具専門相談員は、特定介護予防福祉用具販売計画を作成した際には、当該特定介護予防福祉用具販売計画を利用者に交付しなければならない。

## 第十五章 雑則

第二百十一条 この条例で定めるもののほか、指定介護予防サービスの事業の人員、設備及び運営並びに介護予防のための効果的な支援の方法並びに基準該当介護予防サービスに関する基準関して必要な事項は、規則で定める。

## 附則

### (施行期日)

第一条 この条例は、平成二十五年四月一日から施行する。

### (経過措置)

第二条 指定居宅サービス等基準条例附則第二条の規定の適用を受けている指定短期入所生活介護事業所において指定短期入所生活介護を行う指定短期入所生活介護事業者が、指定介護予防短期入所生活介護事業者の指定を併せて受け、かつ、指定介護予防短期入所生活介護の事業と指定短期入所生活介護の事業を同一の事業所において一体的に運営する場合については、第二百五条第六項第一号イ及びロ、第二号並びに第七項の規定は、適用しない。

第三条 指定居宅サービス等基準条例附則第十一条の規定の適用を受けている基準該当短期入所生活介護事業所において、基準該当介護予防短期入所生活介護の事業と基準該当短期入所生活介護の事業を同一の事業者が同一の事業所において一体的に運営する場合については、基準該当介護予防短期入所生活介護の提供に支障がないと認められる場合は、第三百三十四条第二項第一号イ及びロ並びに第二号の規定は、適用しない。

第四条 平成十三年三月一日前において既に医療法等の一部を改正する法律（平成十二年法律第四十一号）による改正前の医療法第七条第一項の開設の許可を受けていた病院



の建物（同日において既に存していたもの（基本的な構造設備が完成していたものを含み、同日以後に増築され、又は全面的に改築された部分を除く。）に限る。以下「既存病院建物」という。）であつて、同日以後引き続き当該既存病院建物として使用されているものうち、次に掲げる基準を満たす食堂及び浴室を設けていないものを指定介護予防短期入所生活介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の食堂及び浴室の基準については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、次に掲げる基準を満たす食堂及び浴室を設けなければならないこととする。

一 食堂は、内法による測定で、療養病床における入院患者一人につき一平方メートル以上の広さを有しなければならない。

二 浴室は、身体の不自由な者の入浴に適したものでなければならない。

第五条 既存病院建物であつて、平成十三年三月一日以後引き続き当該既存病院建物として使用されているものうち、療養病床に係る一の病室の病床数が四床を上回るものを指定介護予防短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の療養病床に係る一の病室の病床数については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、四床以下としなければならない。

第六条 既存病院建物であつて、平成十三年三月一日以後引き続き当該既存病院建物として使用されているものうち、療養病床に係る病室の床面積が、内法による測定で、入院患者一人につき六・四平方メートル未満であるものを指定介護予防短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の療養病床に係る病室の床面積については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、内法による測定で、入院患者一人につき六・四平方メートル以上としなければならない。

第七条 既存病院建物であつて、平成十三年三月一日以後引き続き当該既存病院建物として使用されているものうち、機能訓練室の床面積が、内法による測定で、四十平方メートル未満であるものを指定介護予防短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の機能訓練室については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、内法による測定で、四十平方メートル以上の床面積を有し、必要な器械及び器具を備えなければならない。

第八条 平成十三年三月一日前において既に開設されていた診療所の建物（同日において既に存していたもの（同日において基本的な構造設備が完成していたものを含み、同日以後に増築され、又は全面的に改築された部分を除く。）に限る。以下「既存診療所建物」という。）であつて、同日以後引き続き当該既存診療所建物として使用されているものうち、次に掲げる基準を満たす食堂及び浴室を設けていないものを指定介護予防

短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の食堂及び浴室の基準については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、次に掲げる基準を満たす食堂及び浴室を設けなければならないこととする。

一 食堂は、内法による測定で、療養病床における入院患者一人につき一平方メートル以上の広さを有しなければならない。

二 浴室は、身体の不自由な者の入浴に適したものでなければならない。

第九条 既存診療所建物であつて、平成十三年三月一日以後引き続き当該診療所の建物として使用されているもののうち、療養病床に係る一の病室の病床数が四床を上回るものを指定介護予防短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の療養病床に係る一の病室の病床数については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、四床以下としなければならない。

第十条 既存診療所建物であつて、平成十三年三月一日以後引き続き当該既存診療所建物として使用されているもののうち、療養病床に係る病室の床面積が、内法による測定で、入院患者一人につき六・四平方メートル未満であるものを指定介護予防短期入所療養介護事業所とする場合における当該指定介護予防短期入所療養介護事業所の療養病床に係る病室の床面積については、第三百三十八条第一項第三号の規定にかかわらず、入院患者一人につき六・四平方メートル以上としなければならない。

第十一条 指定居宅サービス等基準条例附則第十条の規定の適用を受けている有料老人ホームについては、第六百六十四条第三項の規定にかかわらず、浴室及び食堂を設けないことができないものとする。

第十二条 平成十八年四月一日前において既に存していた養護老人ホーム（同日において建築中であつたものを含む。）については、第八十一条第四項第一号イの規定は、適用しない。

第十三条 平成十五年四月一日以前において既に存していた指定介護予防短期入所生活介護事業所（同日において建築中であつたものであつて、同日後に指定介護予防短期入所生活介護事業所となったものを含む。）以下「平成十五年前指定介護予防短期入所生活介護事業所」という。）であつて、平成二十三年九月一日前において既に事業所の一部においてユニットごとに利用者の日常生活が営まれ、これに対する支援が行われる指定介護予防短期入所生活介護事業所（以下「一部ユニット型指定介護予防短期入所生活介護事業所」という。）であつたもの（同日において改修、改築又は増築中の平成十五年前指定介護予防短期入所生活介護事業所（第二十條に規定するユニット型指定短期入所生活介護事業所を除く。）であつて、同日以後に一部ユニット型指定介護予防短期入所

生活介護事業所となったものを含む。)については、この条例の施行の日以後最初の指定の更新までの間は、なお従前の例によることができる。

第十四条 平成十七年十月一日以前において既に存していた指定介護予防短期入所療養介護事業所(同日において建築中であつたものであつて、同日後に指定介護予防短期入所療養介護事業所となったものを含む。以下「平成十七年前指定介護予防短期入所療養介護事業所」という。)であつて、平成二十三年九月一日前に事業所の一部においてユニットごとに利用者の日常生活が営まれ、これに対する支援が行われる指定介護予防短期入所療養介護事業所(以下「一部ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所」という。)であつたもの(同日において改修、改築又は増築中であつた平成十七年前指定介護予防短期入所生活介護事業所であつて、同日以後に一部ユニット型指定介護予防短期入所療養介護事業所となったものを含む。)については、この条例の施行の日以後最初の指定の更新までの間は、なお従前の例によることができる。

第十五条 平成二十三年九月一日前に既に一部ユニット型指定介護老人福祉施設(介護保険法に基づく指定介護老人福祉施設の人員、設備及び運営に関する基準等を定める条例(平成二十四年広島県条例第九号)附則第十条に規定する一部ユニット型指定介護老人福祉施設をいう。以下同じ。)に併設されていた指定介護予防短期入所生活介護事業所であつて、同日以後に、当該一部ユニット型指定介護老人福祉施設が入所定員の減少により指定地域密着型介護老人福祉施設に係る指定を受けたことにより、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の入所定員が当該指定地域密着型介護老人福祉施設の入所定員を上回るものについては、当分の間、第四百四条第三項の規定は、適用しない。

第十六条 平成二十三年九月一日前において既に一部ユニット型指定地域密着型介護老人福祉施設(施設の一部においてユニットごとに入居者の日常生活が営まれ、これに対する支援が行われる指定地域密着型介護老人福祉施設をいう。)に併設されていた指定介護予防短期入所生活介護事業所であつて、同日以後に当該一部ユニット型指定地域密着型介護老人福祉施設が、新規の指定又は届出により地域密着型介護老人福祉施設となり、かつ、その入所定員の減少により、当該指定介護予防短期入所生活介護事業所の利用定員が当該指定地域密着型介護老人福祉施設の入所定員を上回るものについては、当分の間、第四百四条第三項の規定は、適用しない。